

生活実感パイロット調査： 人々の「幸せ」や「不幸せ」を探って

草郷孝好¹ 山本杏子²

2011年3月

¹ 関西大学社会学研究科社会システムデザイン専攻: tkusago@kansai-u.ac.jp

² 大阪大学人間科学研究科博士前期課程

[謝辞]

本報告書は、科学研究費基盤研究 C No.20530436 (研究代表者 草郷孝好、2008 年度－2010 年度)によって実施された調査研究であり、日本学術振興会の支援に心から深く感謝の意を表します。また、本調査の実施にあたり、兵庫県庁企画県民部政策室ビジョン課をはじめ、兵庫県内の2つの地区にて快く調査協力をしていただいた方々一人一人に心から感謝を申し上げます。どうもありがとうございました。

1. はじめに

世界の各地で、幸福に関する関心が高まっています。南アジアの小国ブータンでは、国民総幸福(GNH: Gross National Happiness)を国家の中心目標に掲げ、フランス、イギリス、カナダ、オーストラリアなどの OECD 諸国でも、社会の進歩を測るものさしについての議論の中で幸せや生活への満足感などが大切といわれるようになりました。そのための具体的な取り組みも進められつつあります。日本でも、昨年、最小不幸社会というスローガンが登場し、年末には、内閣府により「幸福度に関する研究会」が設置されています。

このように国内外にて、にわかに注目されてきている幸福や生活への満足なのですが、これらは、いったいどのようなものなのでしょう。心理学者、社会学者、社会疫学者、経済学者などの知見が蓄積されてきたおかげで、いろいろなことがわかってきています。たとえば、幸せには生計を立てる糧である経済力、心と体の健康、知識や技能を生かす機会、人と人とのつながりなど、実に多くの要素がかかっているということ、などです。今のところ、これらの知見は、政府の取り組みの中でも生かされつつありますが、具体的には、長い間、社会経済発展の指標として使われてきた GDP (Gross Domestic Products: 国内総生産) に代わる新しい発展指標開発に焦点をあてた技術論主体の研究が多いのが現状です。指標は確かに大切な役割を持っています。しかし、指標を構築する前に、生活する人々がどのような社会を実現したいのかを明らかにしていなければ、指標の設計もうまくできませんし、指標をどのように利用するのも見えてきません。そのためには、多くの市民の声を集めていく地道な作業が必要とされるわけです。

2009 年から 3 年間、人間開発論の立場から社会進歩や個人の充足感に着目した研究プロジェクトを科学研究費基盤研究C「先進国型人間開発指数(HDI-I)の開発」と題して、取り組んできました。この研究プロジェクトは、国連開発計画が開発した HDI (Human Development Index: 人間開発指数) を参考に構想され、3 年間で、日本の HDI の計測、主観的な幸福感指標データの分析、海外におけるウェル・ビーイング指標の取り組みの調査などに取り組んできました。これらの研究活動から、幸福や満足を左右する可能性のあるものに関する見方への知見を得ることができました。しかし、研究者が整理しつつある幸福や満足を左右する要素が、はたして、本当に人々の考える幸せや満足につながっているのかどうか、つながっているとして、そのつながり方は、地域性を問わず一様なのかどうか、などなど、まだ紐解いていくべき課題がたくさんあるわけです。

そこで、今回、3 年間の研究の最終年にあたり、実際に生活している人々から、直接、生活を振り返ってもらえるような調査を設計し、具体的な話を聞き出すことによって、幸せや不幸せの要素を深く掘り下げていくことにしました。本報告書は、そのまとめにあたるものです。以下、調査の方法、調査回答者の特徴、主な調査結果、まとめの順でその概要を紹介したいと思います。

2. 調査の方法

今回の調査は、兵庫県内で実施することとしました。なぜ兵庫県なのかについては、兵庫県庁企画県民部政策室ビジョン課が中心となって取り組んできている「2 世紀兵庫長期ビジョン」プロジェクトの一環として、同県が平成 14 年度から毎年実施してきた兵庫県民意識調査に着目したからです。この調査は、兵庫県内 10 の県民局単位でサンプル取りを行い、県民の目によって、自分の生活について、主観評価を行っているものです。この調査は、先に触れたような幸福や満足感、広

く言うところのウェル・ビーイングに関係するといわれている多くの要素をカバーしているものでした。そこで、本研究では、県民意識調査のデータを活用し、県民による生活評価指標の研究を行っています。と同時に、この調査の内容を参考にしながら、一人一人の声をもとにして、幸せや不幸せの要素や構造を探ることもできるのではないかと考え、調査をデザインし、実施することにしました。

調査にあたっては、大きく2つの種類のデータを収集することにしました。1つは、生活実感に関するアンケート調査です。この調査票には、①幸福感や満足度に関する質問群、②個々の人の価値観に関する質問群、③兵庫県民意識調査の質問群、④個々の回答者の属性に関する質問群、の4種類の質問項目群で構成しました。これらのデータによって、人々の幸福や満足の度合いの把握、それらの高低を左右する主たる要素の確認、価値観(たとえば、物のゆたかさか心の豊かさのどちらを志向しますか、というようなものを指します)と幸福度や満足感との関係性、そして、兵庫県民意識調査によって身のまわりの生活評価から何がみえてくるのだろうかということを探索、最後に、属性を用いて、分析を行うこととしました。

今回の調査で何とかして、手がかりをつかみたいと考えていたのは、結局、「人は何を幸福と生きて生きているのか」、ということです。それは、必ずしも様ではないにせよ、何か共通の思いや要素があるのではないだろうか。人によって、大切と思う要素の受け止め方が異なるのだろうか。そうであれば、どのように異なるのであろうか。これらの疑問を突き止めていくために、アンケート調査回答者の中から、インタビュー調査を行うことも計画しました。インタビュー調査では、幸せと不幸せの2種類の質問を尋ねることになりました。幸せに関する質問では、「今まで生きてきた中で、幸せと感じたときはどのようなときか」「あなたにとって幸せな人生とはどのような人生か」「幸せな人生を送るために、あなたが心がけていることは何か」という3つの質問を、また不幸せに関する質問では、「今まで生きてきた中で、不幸せと感じたときはどのようなときか」「今までの人生の中でつらかったのはどのようなときか」「あなたにとって不幸せな人生とはどのような人生か」の3つの質問について尋ねてみました。インタビューによって得られた回答データをもとにして、いくつかの分析を行いました。

調査地ですが、パイロット調査という位置づけから、農村部(但馬地域内)と都市部(阪神南地域内)から1つずつ地区を選び、調査を行うことにしました。³

以下、調査分析の概要を紹介しますが、その前に、留意していただきたいことがあります。今回の調査は、サンプル数もとても少なく、サンプリングの方法も十分なものではありません。一番の目的は、生活者の声を集めて、社会の改善に生かしていくためのツール、つまり「生活実感調査」という生活当事者による地域生活モニタリング手法の開発を進めていくためのステップとしてのパイロット調査であるという点です。したがって、今回の調査結果から、兵庫県、但馬、阪神南という各地域全体、および、それぞれの地域内の農村部や都市部で生活する人々の声を代弁することはできませんので、その点、どうぞご理解いただき、1つの参考として読み進めていただければと思います。

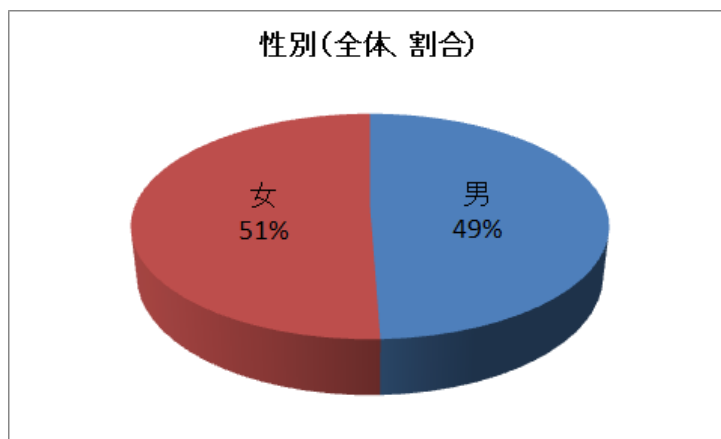
3. 調査回答者の特徴

さて、本調査への回答者の特徴から見ていきたいと思えます。

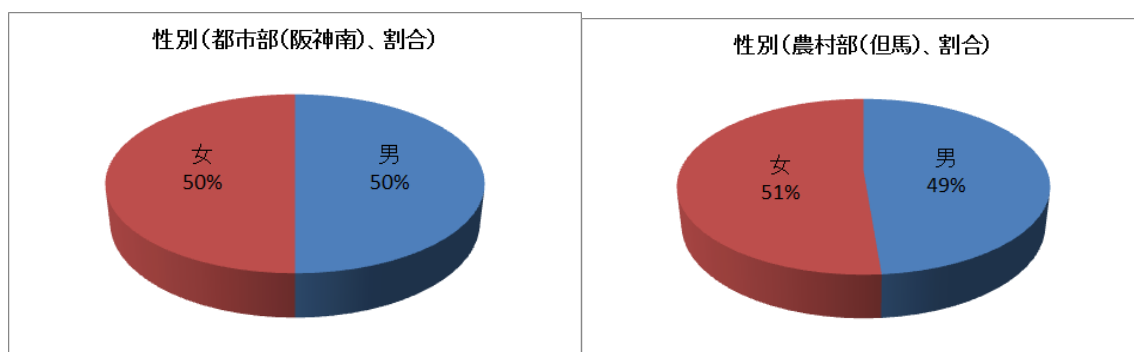
まず、今回のアンケート調査にご協力頂いたのは、計90名(男43人、女44人、無回答3人)で

³ できるかぎり多くの地域において、調査実施をすることが望ましいのですが、今回は、調査チームの制約、時間の制約により、小規模の調査になりました。この点は、今後の課題です。

した(グラフ 1)。また、都市部(阪神南)、農村部(但馬)に分けてみると、都市部地区では、計 49 名(男 24 人、女 24 人、無回答 1 人)の方が、農村部地区では、計 40 名(男 19 人、女 20 人、無回答 1 人)の方が、アンケートに回答しています(グラフ 2)。今回の調査では、グラフからもわかるように、都市部地区・農村部地区の双方で、男性と女性の声をバランスよく集めることができています。

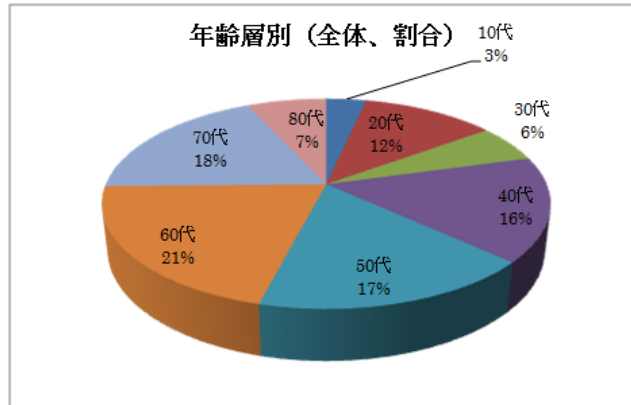


グラフ 1:回答者の性別分布(全体)

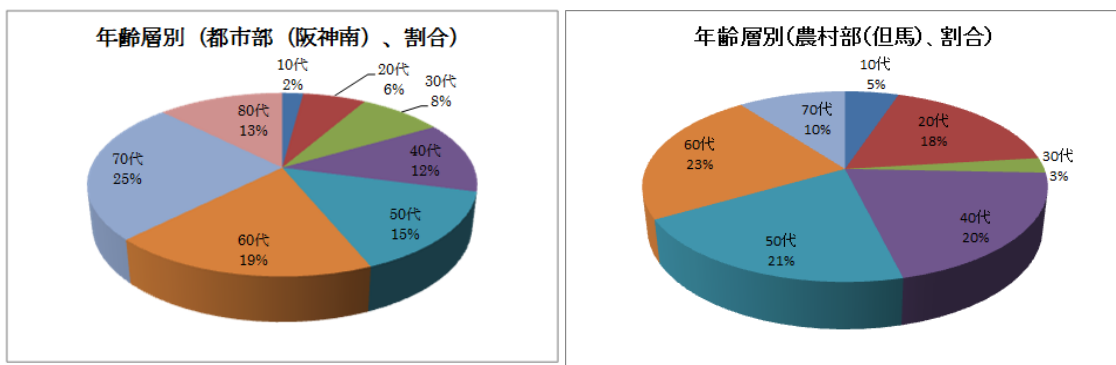


グラフ 2:回答者の性別分布(地区別)

次に、回答者の年齢層を見てみると、40代、50代、60代、70代の方が多く、特に60代の方の割合が高くなっています。その一方で、10代、20代、30代の若い方の割合が少なくなっています(グラフ 3)。また、回答者の年齢層を都市部地区と農村部地区で分けてみると、都市部地区では、農村部地区に比べ、70代、80代の回答者の割合が高く、また20代の方の割合が低い結果となりました(グラフ 4)。

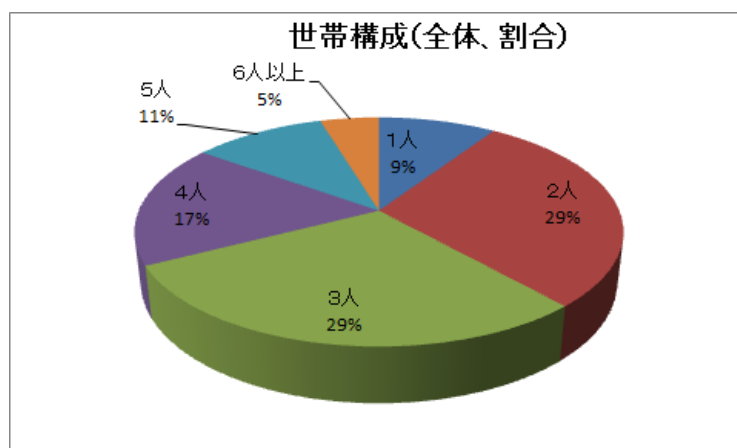


グラフ 3: 回答者の年齢層別分布 (全体)

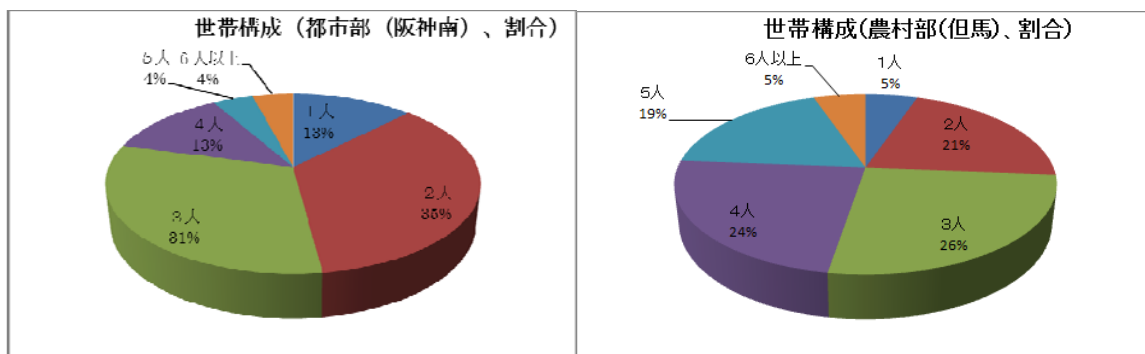


グラフ 4: 回答者の年齢層別分布 (地区別)

さらに、世帯構成を見てみると、約 6 割(58.9%)の方が、3 人以上の同居世帯であり、1 人暮らしの方は比較的少なくなっています(グラフ 5)。しかし、世帯構成を都市部地区と農村部地区に分けてみると、都市部地区の方が 1 人や 2 人暮らしの方の割合が比較的高いことが分かります(グラフ 6)。



グラフ 5: 回答者の世帯構成別分布 (全体)



グラフ 6: 回答者の世帯構成別分布 (地区別)

4. アンケートによる生活実感の総合評価

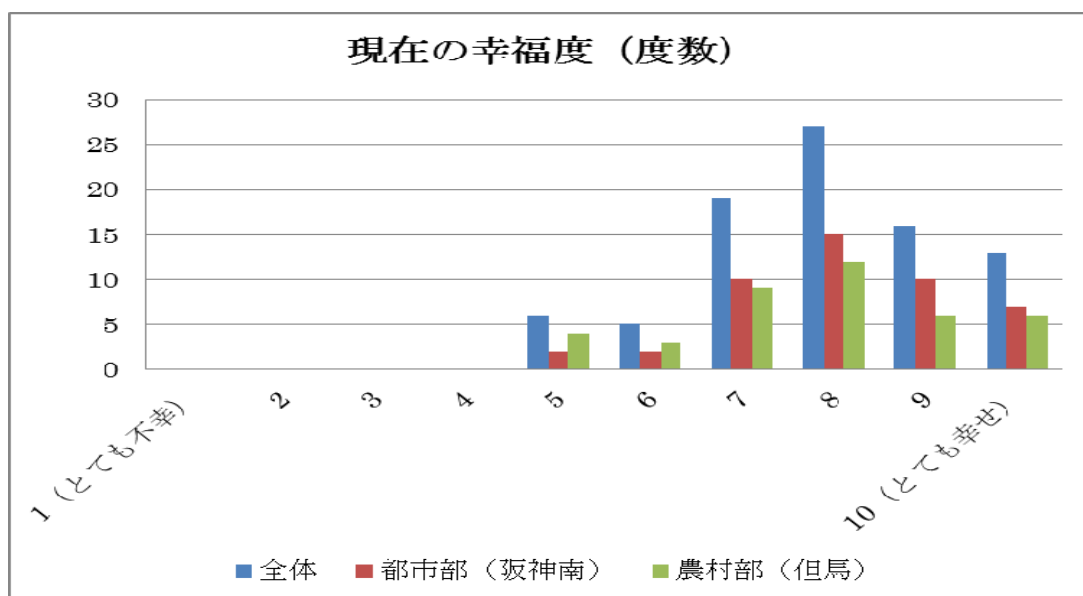
～そもそもどの程度幸せであり、生活に満足しているのでしょうか。

今回の調査では、5種類の異なる観点から、自身の生活に対して、どの程度の生活実感を持っているのかを探ってみることにしました。具体的には、<幸福度>、<生活満足度>、<SWLS>、<自分らしい生活ができているか>、<昨年と比較しての生活の改善>に関する質問を用いてみました。以下に、その結果を順に紹介します。

4.1 5つの主観データによる生活実感レベル

<幸福度>

みなさんの現在の幸福度を0～10点で尋ねました。その結果、幸福度の平均値は、7.9点でした。グラフからもわかるように、7～9点の間に多くの回答が集中しています。地区別の分布の仕方も大きくは変わらないようです。4点以下という人はいないことから、今回の調査回答者の中には、不幸度の高い人があまり含まれていないことが推測されます。

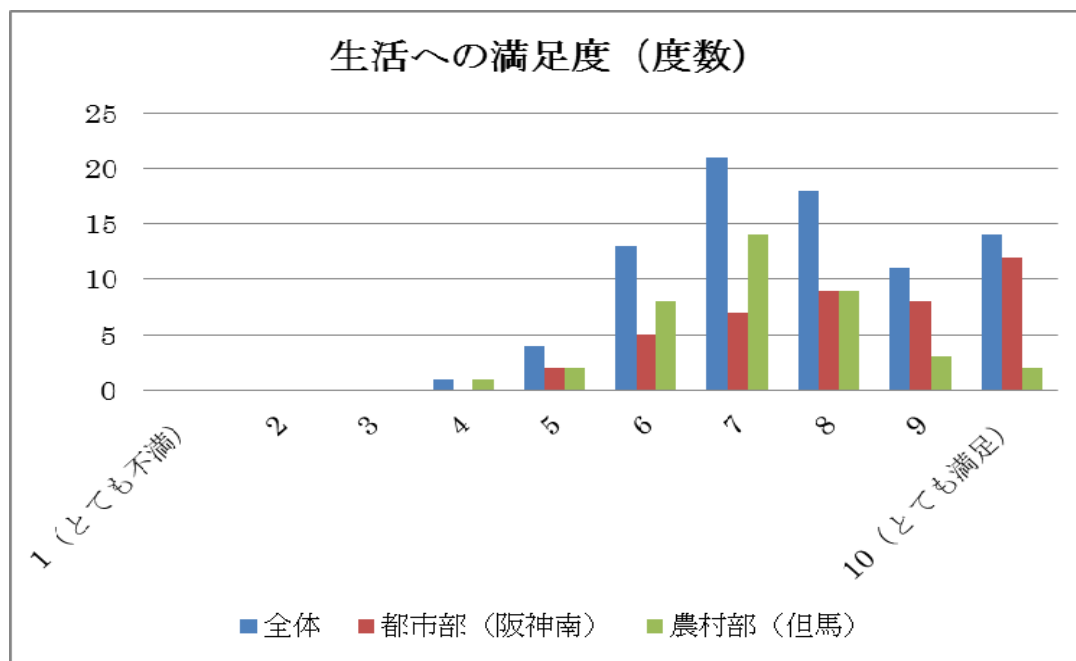


グラフ 7: 現在の幸福度

<生活満足度>

さらに、どの程度、現在の生活に満足しているか(生活満足度)を0～10点で尋ねてみたところ、生活満足度の平均点は 7.7 点であり、度数分布はグラフ8のようになりました。このグラフからもわかるように全体的には7～8点の間に多くの回答が集中しています。

生活満足度は、幸福度と異なり、地区間で分布に差異が見られます。都市部地区の方が満足度の高い人が多くなっていますが、他方、農村部地区では、7点あたりに山ができています。



グラフ 8:生活満足度

<SWLS>

SWLSというのは、アメリカの心理学者のエド・ディーナー (Ed Diener)らが開発した Satisfaction with Life Scale(生活への満足度尺度)のことを指しています。これは、以下の5つの質問項目について、1点(全くあてはまらない)から、7点(非常によくあてはまる)までの7段階の選択レベルを用い、その合計点を算出し、回答者の人生満足度を測るという尺度です。

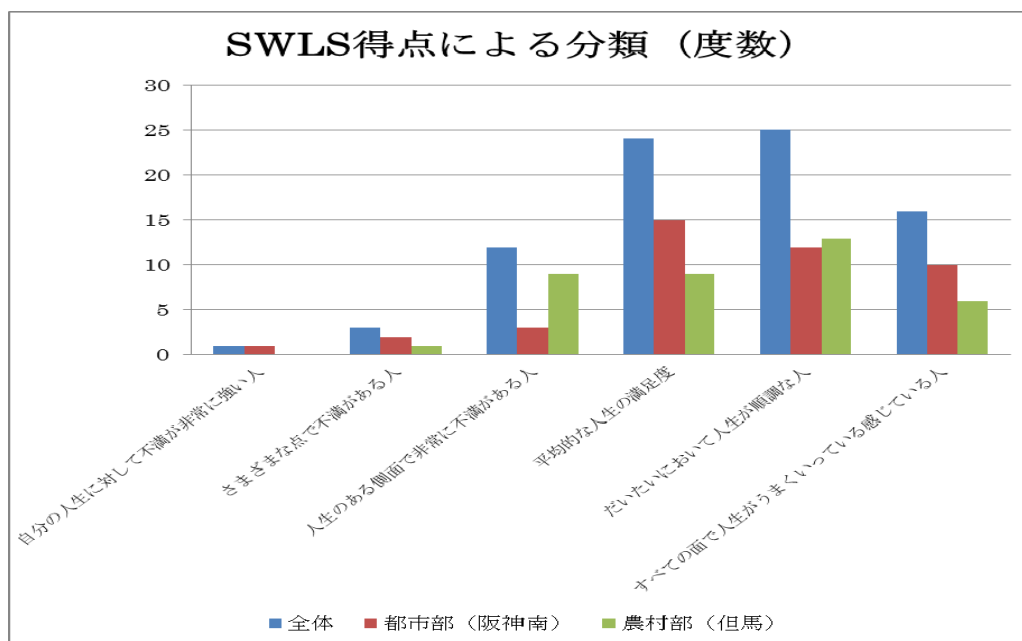
- ①ほとんどの面で、私の人生は私の理想にちかい
- ②私の人生は、とてもすばらしい状態だ
- ③私は自分の人生に満足している
- ④私はこれまで、自分の人生に求める大切なものを得てきた
- ⑤もう一度人生をやり直せるとしても、ほとんど何も変えないだろう

(大石繁宏 「幸せを科学する」p48 から引用)⁴

ディーナーは、SWLSの得点が30点以上(すべての面で人生がうまくいっていると感じている人)、

⁴大石繁宏(2009), 『幸せを科学する 心理学からわかったこと』, 新曜社

25点～29点(だいたいにおいて人生が順調な人)、20～24点(平均的な人生満足度)、15～19点(人生のある側面で非常に不満がある人)、10点～14点(人生の様々な点で不満がある人)、5点～9点(自分の人生に対して非常に不満が高い人)の6つに分類しています。⁵ 今回の分析でもこのディナーの6分類に従い、分析を進めました。その結果はグラフ9のようになっています。



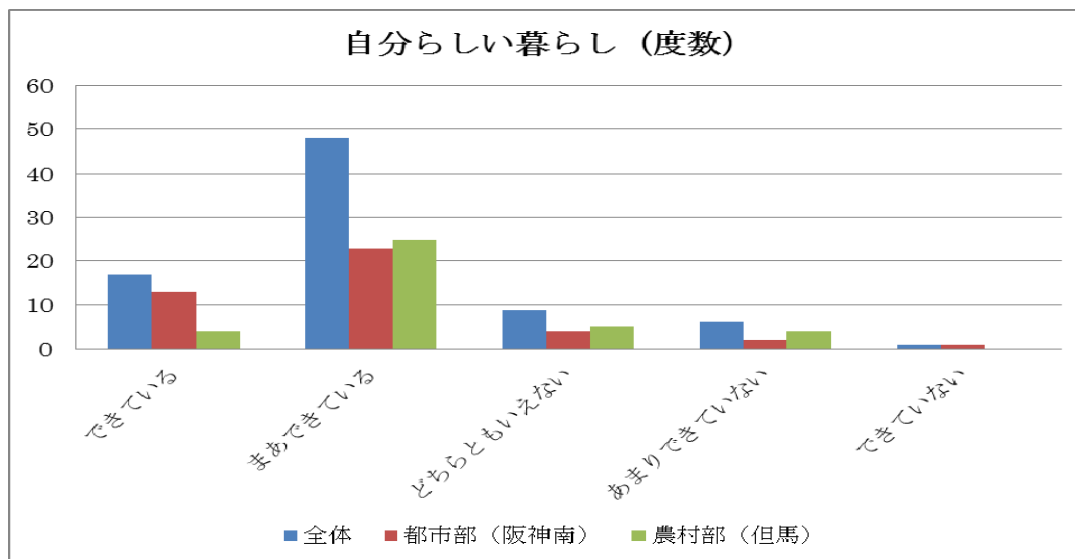
グラフ9:生活への満足度尺度(SWLS)得点による度数分布

このグラフから、農村部地区では、幸福感の高低を感じる人が散らばっており、都市部地区では、比較的多くの人が平均的な人生の満足度以上であることがわかります。

<自分らしい暮らしができていますか>

今回の調査では、現在の幸福度や生活満足度、心理学者が考案した生活満足度尺度の他に、「自分らしい暮らしができていますのかどうか」について質問してみました。グラフ10からもわかるように、回答者全体でも、また都市部地区・農村部地区のどちらにおいても、「まあできています」あるいは「できています」と感じていると回答した人が多いようです。

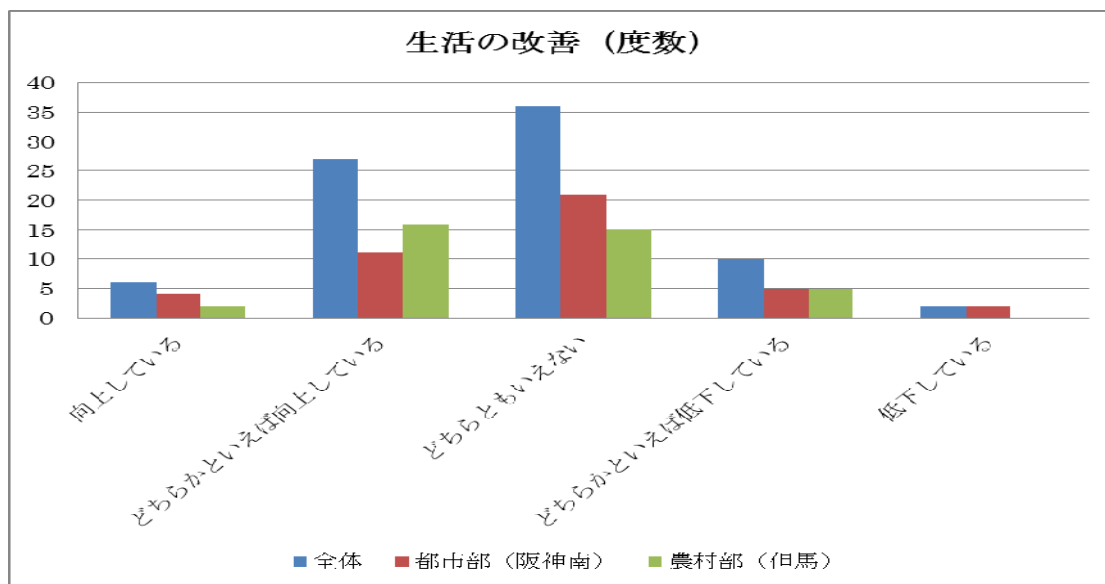
⁵ Diener, E., Emmons, R.A., Larsen, R.J., and Griffin, S. (1985), The Satisfaction With Life Scale. *Journal of Personality Assessment* 49, 1, 71-75.



グラフ 10: 自分らしい暮らしへの回答

<生活の改善>

また今回の調査では、昨年と比較して、現在の生活が向上しているかを、5段階で尋ねました。全体、都市部地区では、「どちらともいえない」と回答する方が一番多く、「どちらかといえば向上している」と回答する方がその次に多い一方で、農村部地区では、「どちらかといえば向上している」と回答した方が一番多い結果となりました(グラフ 11)。



グラフ 11: 去年からの生活の改善への回答

4.2 5つの幸せデータの関係性

一人の人の幸せを5つの異なる視座をもとにしてデータを収集し、それらを別々に分析してみました。では、これら5つのデータを組み合わせると何か気づくことがあるのでしょうか。せっかくですので、5つのデータ間の相関関係を見てみたいと思います。

相関関係を調べるということですが、それは、例えば、現在の幸福度が高いと答えた人は、生活満足度が高いと回答する傾向にあるのかどうか、自分らしい暮らしができていないと回答した人は、幸福度が高いと回答する傾向にあるのかどうかなどを調べてみるということです。相関関係の結果は、表3に示してあります。

その結果、現在の幸福度と生活への満足度、生活への満足度と SWLS、自分らしい暮らしと SWLS の相関があることがわかります。さらに、「自分らしい暮らしができていないかどうか」は、現在の幸福度、生活への満足度、SWLS との間に相関関係があることから、「自分らしい暮らし」ができていない人は、幸福度や生活への満足度が高い傾向にあることが見えてきました。

表 3:5 つの幸せに関する質問項目への回答間の相関関係

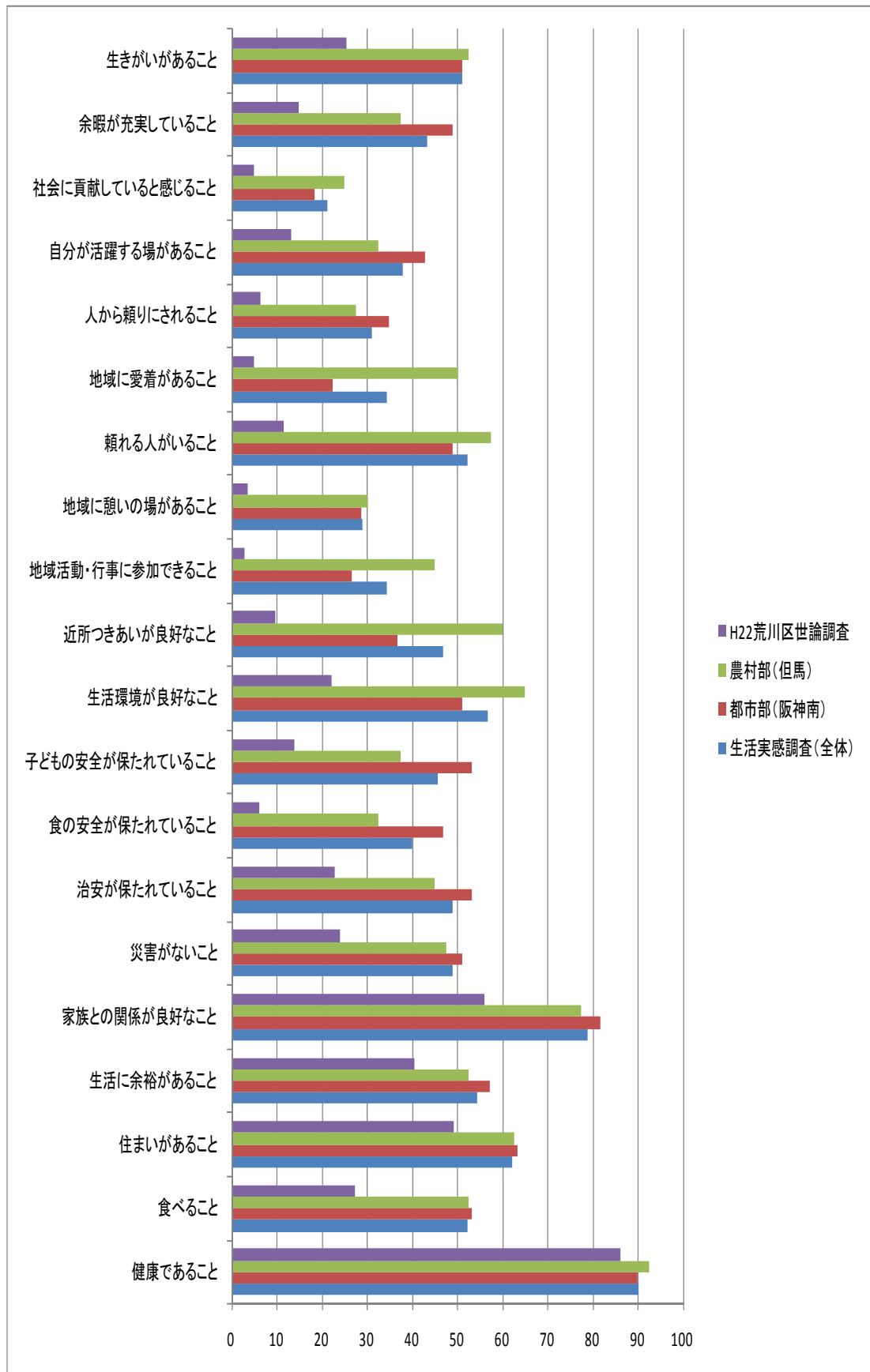
		Q1-幸福度(現在)	Q7 生活への満足度	Q8 自分らしい暮らし	Q9 生活の改善(昨年との比較)	SWLS
Q1-幸福度(現在)	Pearson の相関係数	1.000	.569**	.352**	.259*	.466**
	有意確率(両側)		.000	.001	.020	.000
	N	86	82	81	81	81
Q7 生活への満足度	Pearson の相関係数		1.000	.444**	.283*	.563**
	有意確率(両側)			.000	.011	.000
	N		82	81	81	81
Q8 自分らしい暮らし	Pearson の相関係数			1.000	.320**	.573**
	有意確率(両側)				.004	.000
	N			81	81	81
Q9 生活の改善(昨年との比較)	Pearson の相関係数				1.000	.175
	有意確率(両側)					.117
	N				81	81
SWLS	Pearson の相関係数					1.000
	有意確率(両側)					
	N					81

5. 幸せの要素～幸せな生活に必要なこと

今回の調査では、様々な主観的な幸福度の他に、「幸せな生活のために必要なこと」を選択形式で質問しました。⁶ 結果は、グラフ 12 に示してあります。これを、回答者の多い順位に見てみます(表1)。生活実感調査の全体、都市部地区、農村部地区に加えて、参考として、荒川区世論調査の結果を並べてあります。

興味深いこととして、まず、「健康であること」と「家族との関係が良好なこと」が第1位と第2位に挙げられていることです。さらに、都市部地区と荒川区では、第1位～第10位までに挙げられている項目に大きな違いがありません。他方、農村部地区では、「近所つきあいが良好なこと」「地域に愛着があること」など、地域に関する項目が重要となっていることが特徴的です。都市部の生活で欠かせないこと、農村部の生活で欠かせないことが、生活者の視点からも見て取ることができます。

⁶ ここで利用した選択項目は、東京都荒川区で行われている荒川区世論調査のものを採用しました。



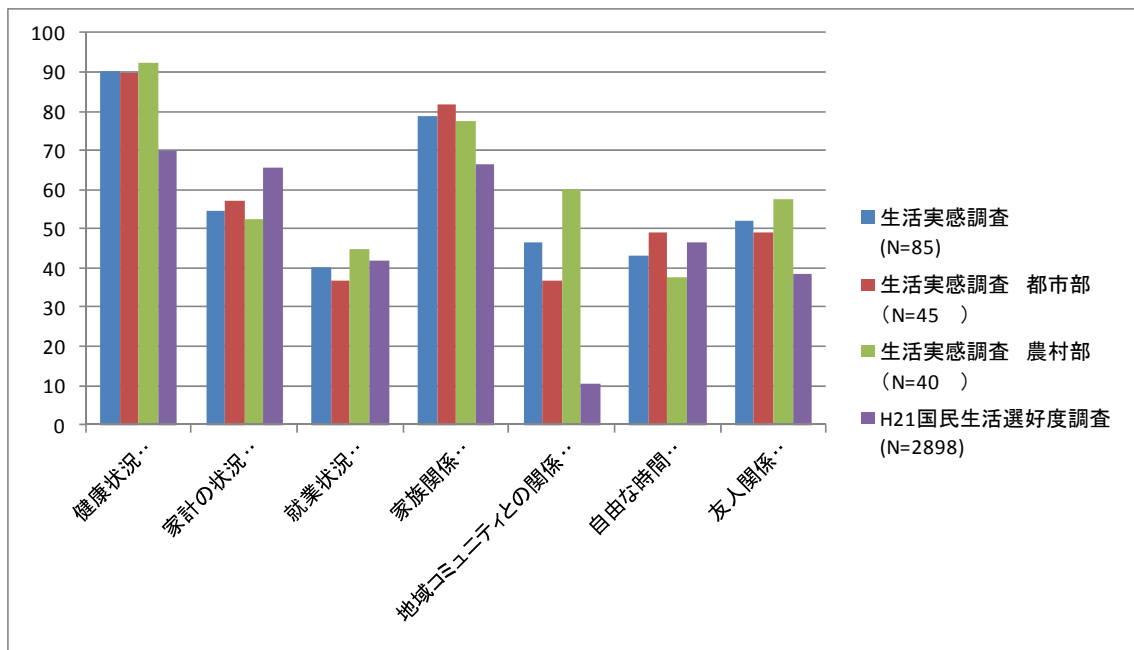
グラフ 12: 幸福な生活に必要なこと

表 1: 幸せな生活に必要なこと(回答者割合の多い順): 調査別

生活実感調査 全体	生活実感調査 都市部	生活実感調査 農村部	H22 荒川区世論調査
第1位 健康であること	健康であること	健康であること	健康であること
第2位 家族との関係が良好なこと	家族との関係が良好なこと	家族との関係が良好なこと	家族関係が良好なこと
第3位 住まいがあること	住まいがあること	生活環境が良好なこと	住まいがあること
第4位 生活環境が良好なこと	生活に余裕があること	住まいがあること	生活に余裕があること
第5位 生活に余裕があること	食ること	近所つきあいが良好なこと	食ること
第6位 食ること	治安が保たれていること	頼れる人がいること	生きがいがあること
第7位 頼れる人がいること	子どもの安全が保たれていること	食ること	災害がないこと
第8位 生きがいがあること	災害がないこと	生活に余裕があること	治安が保たれていること
第9位 災害がないこと	生活環境が良好なこと	生きがいがあること	生活環境が良好なこと
第10位 治安が保たれていること	生きがいがあること	地域に愛着があること	余暇が充実していること
第11位 近所つきあいが良好なこと	頼れる人がいること	災害がないこと	子どもの安全が保たれていること
第12位 子どもの安全が保たれていること	余暇が充実していること	治安が保たれていること	自分が活躍する場があること
第13位 余暇が充実していること	食の安全が保たれていること	地域活動・行事に参加できること	頼れる人がいること
第14位 食の安全が保たれていること	自分が活躍する場があること	子どもの安全が保たれていること	近所つきあいが良好なこと
第15位 自分が活躍する場があること	近所つきあいが良好なこと	余暇が充実していること	人から頼りにされること
第16位 地域に愛着があること	人から頼りにされること	食の安全が保たれていること	食の安全が保たれていること
第17位 地域活動・行事に参加できること	地域に憩いの場があること	自分が活躍する場があること	地域に愛着があること
第18位 人から頼りにされること	地域活動・行事に参加できること	地域に憩いの場があること	社会に貢献していると感じる
第19位 地域に憩いの場があること	地域に愛着があること	人から頼りにされること	地域に憩いの場があること
第20位 社会に貢献していると感じる	社会に貢献していると感じる	社会に貢献していると感じる	地域活動・行事に参加できること

また、内閣府の国民生活選好度調査においても、「幸福感を判断する際に重要視した項目」を選択式で質問しています。そこで、今回の生活実感調査で利用した項目の中で類似する項目を選び出して、調査結果を比較してみました(グラフ 13)。幸福感を判断する際に重要視した項目の回答割合の高い順に並べてみました(表 2)。

ここでも、やはり、「健康状況」「家族関係」が第 1 位と第 2 位にあげられていました。国民生活選好度調査や本調査の都市部地区では第 3 位に「家計の状況」があげられていますが、農村部地区では、「地域コミュニティとの関係」や「友人関係」が「家計の状況」よりも重要な項目としてあがっています。生活する地域の特性によって、個人の生活の仕方や幸福感が影響を受ける可能性が高いことが推察されます。



グラフ 13: 幸せな生活に必要なこと(抜粋項目比較)

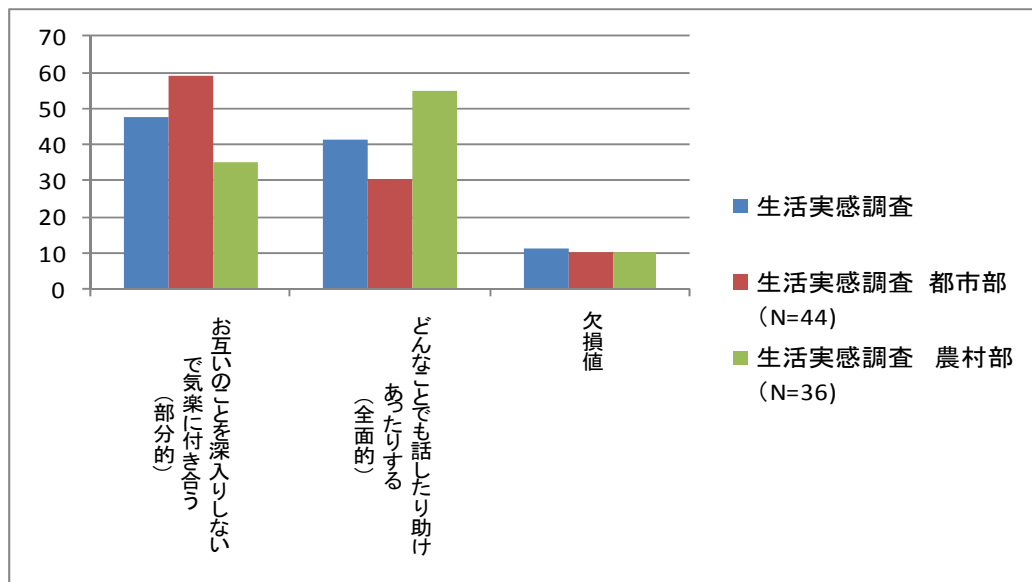
表 2 幸福感を判断する際に重要視した項目(回答者割合の多い順):調査別

	H21 国民生活選好度調査	生活実感調査	生活実感調査(都市部)	生活実感調査(農村部)
第1位	健康状況 (健康であること)	健康状況 (健康であること)	健康状況 (健康であること)	健康状況 (健康であること)
第2位	家族関係 (家族との関係が良好なこと)	家族関係 (家族との関係が良好なこと)	家族関係 (家族との関係が良好なこと)	家族関係 (家族との関係が良好なこと)
第3位	家計の状況 (生活に余裕があること)	家計の状況 (生活に余裕があること)	家計の状況 (生活に余裕があること)	地域コミュニティとの関係 (近所つきあいが良好なこと)
第4位	自由な時間 (余暇が充実していること)	友人関係 (頼れる人がいること)	自由な時間 (余暇が充実していること)	友人関係 (頼れる人がいること)
第5位	就業状況 (就業状況 仕事の有無)	地域コミュニティとの関係 (近所つきあいが良好なこと)	友人関係 (頼れる人がいること)	家計の状況 (生活に余裕があること)
第6位	友人関係 (頼れる人がいること)	自由な時間 (余暇が充実していること)	就業状況 (就業状況 仕事の有無)	就業状況 (就業状況 仕事の有無)
第7位	地域コミュニティとの関係 (近所つきあいが良好なこと)	就業状況 (就業状況 仕事の有無)	地域コミュニティとの関係 (近所つきあいが良好なこと)	自由な時間 (余暇が充実していること)

6. 個人の多様な価値観

今回の調査では、幸せや満足感の要素に加えて、個人個人の持つ考え方や意識の違いがどのように個人の幸せの度合いや感じ方などに関係するのかにも着目しています⁷。そこで、望ましいと思う友人との付き合い方、隣人との付き合い方、親戚との付き合い方、望ましいと思う地域会合の進め方、生活目標に関する質問群を用意しました。

親しい友人との付き合い方(グラフ 14)からは、都市部地区では、部分的な付き合いを望む人の割合が多いのに対して、農村部地区では全面的な付き合いが望ましいと思う人の割合が多いことがわかります。

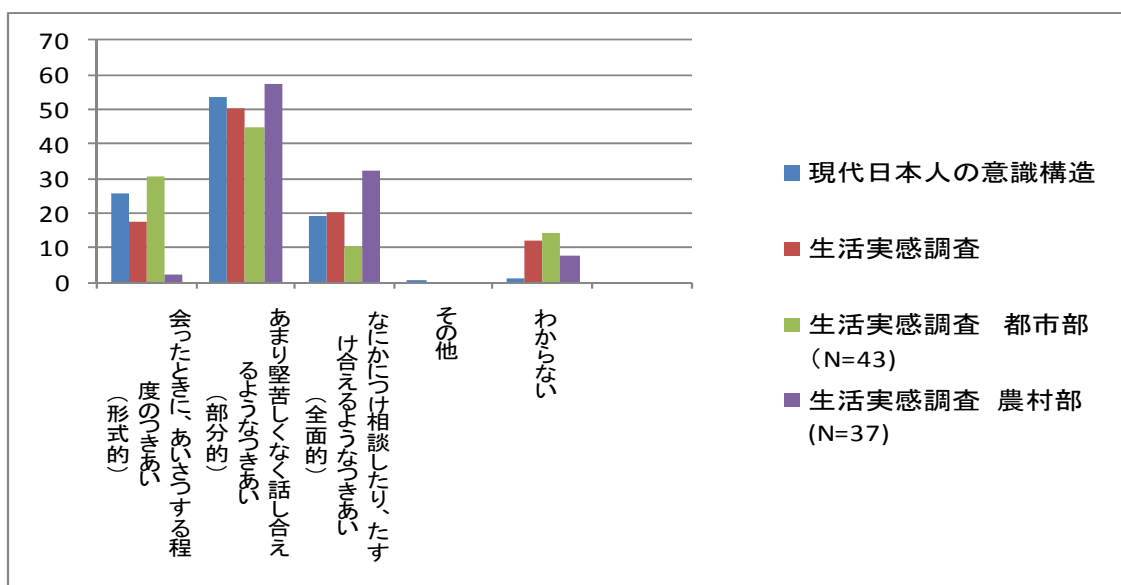


グラフ 14:親しい友人との付き合い方(割合)

さらに、隣人との付き合い方(グラフ 15)を見てみると、部分的な付き合いが望ましいと考える人の割合が、NHK 放送文化研究所による「日本人の意識」調査の結果でも、今回の生活実感調査におい

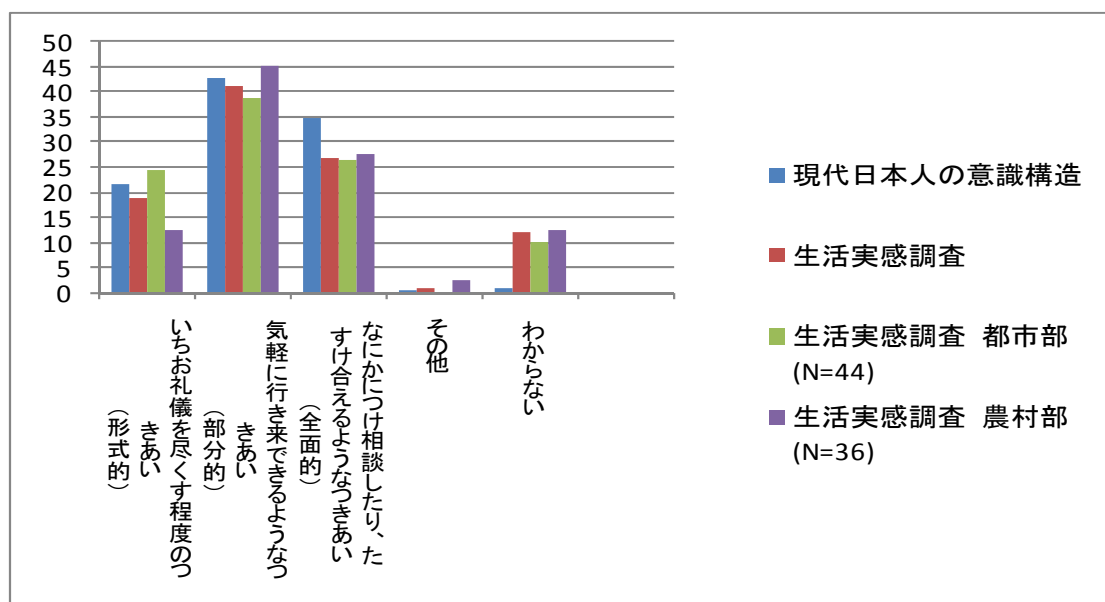
⁷ 質問項目は、NHK 放送文化研究所が 1973 年から 5 年おきに行っている「日本人の意識」調査から採用しました。詳細は、NHK 文化放送研究所(2010)「現代日本人の意識構造(第 7 版)」NHK ブックスを参照してください。

でも、高いことがわかります。しかし、全面的な付き合いの回答を見てみると、農村部地区では、それを望ましいと考える人の割合が、都市部地区やNHK調査と比べて高くなっています。



グラフ 15: 隣人との付き合い方(割合)

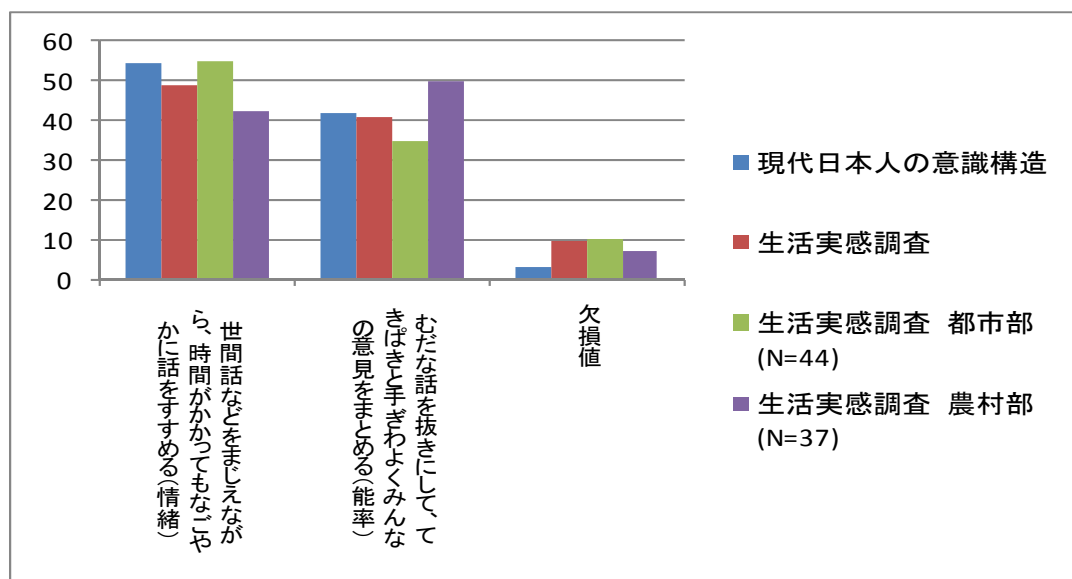
また、親戚との付き合い方(グラフ 16)では、NHK 調査においても、都市部地区・農村部地区においても、「部分的なつきあいをするのが望ましい」と考える人が多いことがわかります。



グラフ 16: 親戚との付き合い方(割合)

次に、地域会合の進め方に関する回答(グラフ 17)を見てみます。NHK 調査と農村部地区では、「情緒を重視する人」の割合が多いのですが、都市部地区では、「能率を重視する人」の割合が多い

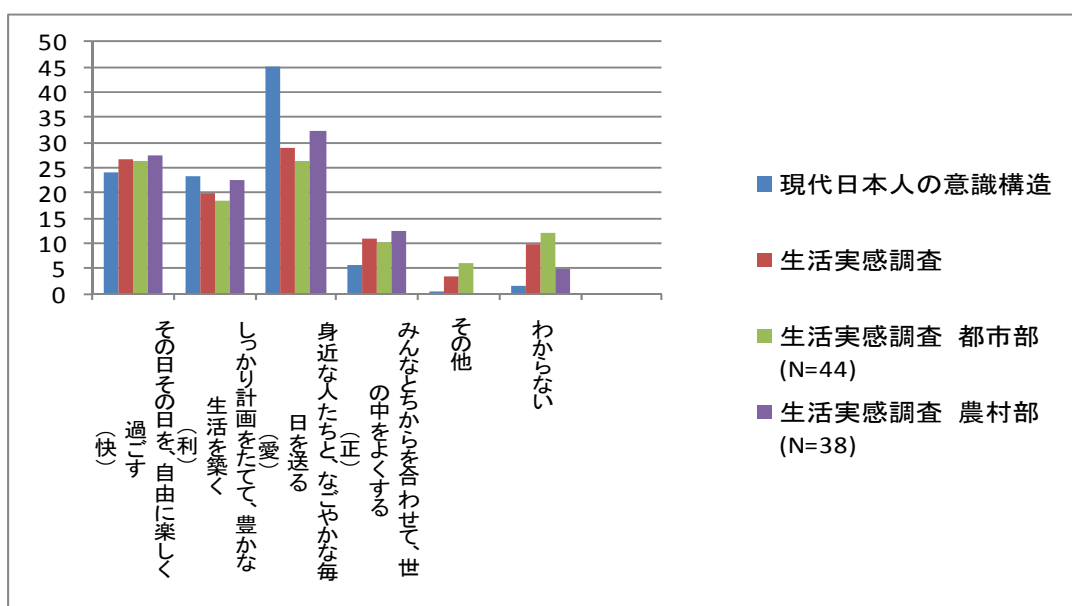
ことがわかります。地域会合の進め方で重視することについては、都市部地区と農村部地区の間では違いがあることが見えてきました。



グラフ 17: 地域会合の進め方

最後に「生活目標」を見てみます。この質問は、見田宗介が考案した価値観志向の分類に即したもので、先のNHKの調査に長年採用されてきたものです。生活実感調査に取り入れてみました。

その結果は、グラフ 18 の通りです。今回の調査では、NHK 調査と同様に、「愛」を重視する人が多く、「正義」を重視する人が少ないという結果になりました。しかし、「正義」を重視する人の割合が、NHK の調査結果と比べて高く、その中でも特に農村部で若干その割合が高いことがわかります。これは、今回の調査回答者の構成が NHK 調査の構成よりも、やや高齢者に偏っていることなど関係しているのかもしれませんが。



グラフ 18: 生活目標に基づく価値観志向分類(割合)

7. 人とのつながり

幸福には人とのよい関係性が大切になってくるといわれています。社会的関係性(ソーシャルキャピタル)とも言われるものです。

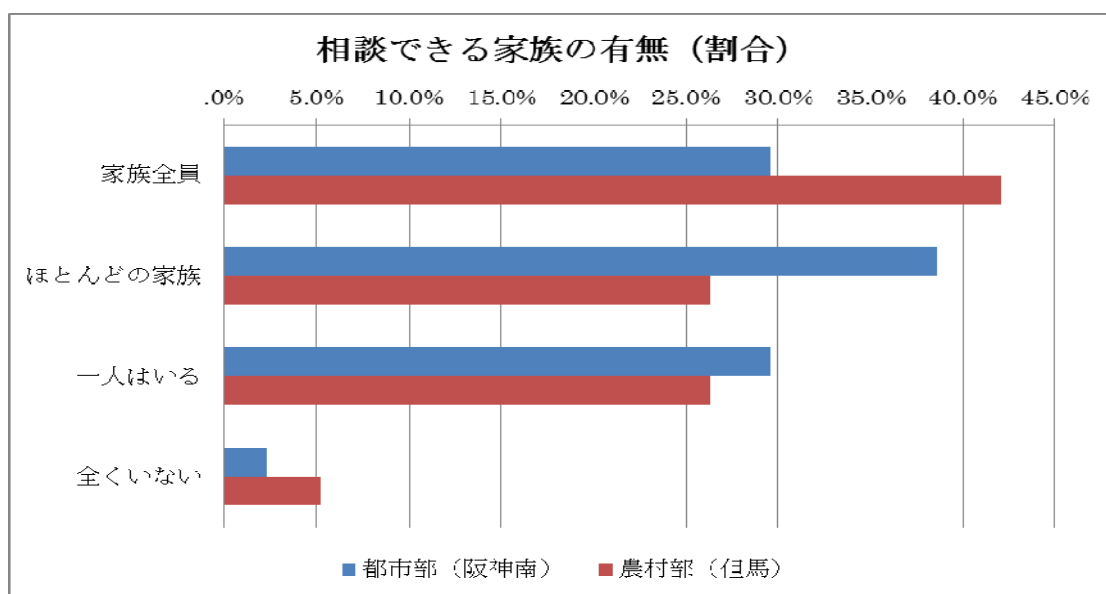
今回の調査でも、友人や隣人など、人々との関係性に注目した質問を行ってみました。そこから、わかってきたことを紹介します。

7.1 家族・友人・隣人とのつながり

幸福感や生活への満足感を左右するものの1つには、人とのつながりがあるという研究結果がたくさん出てきています。ソーシャルキャピタル(社会的関係資本)という言葉がよく使われていますが、これは、どれくらいのネットワークの広がりや深さを持っているのかどうかということに密接に関係しているものといつてよいでしょう。

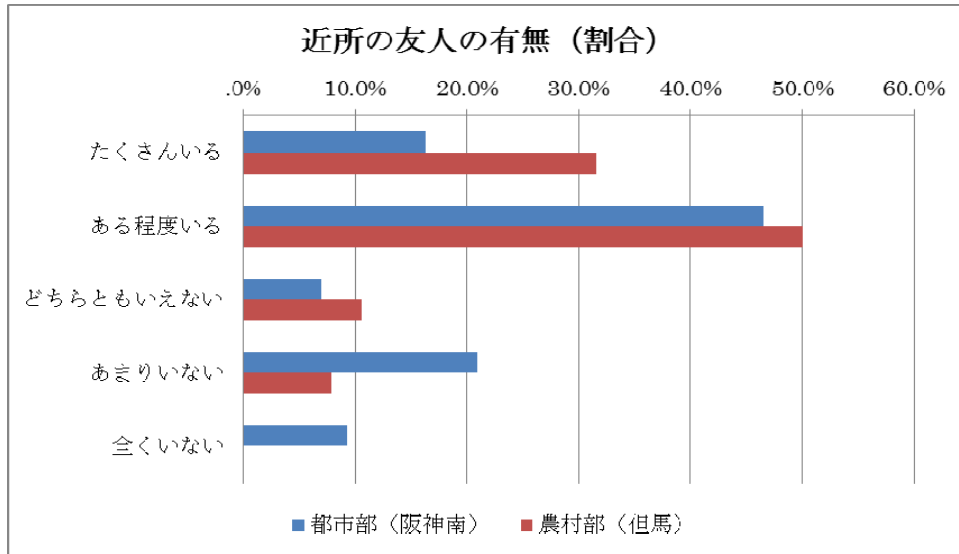
そこで、今回、生活実感調査の中でも、家族、友人、隣人の数や信頼できる人の割合を質問してみました。

「家族の中で悩みを相談できる人がどの位いるのかどうか」に関する質問については、ほとんどの方が、1人以上はいるということでした。都市部地区と農村部地区を見てみると、農村部地区では、家族全員と悩みを相談できる人の割合が多いのが目をひきます。

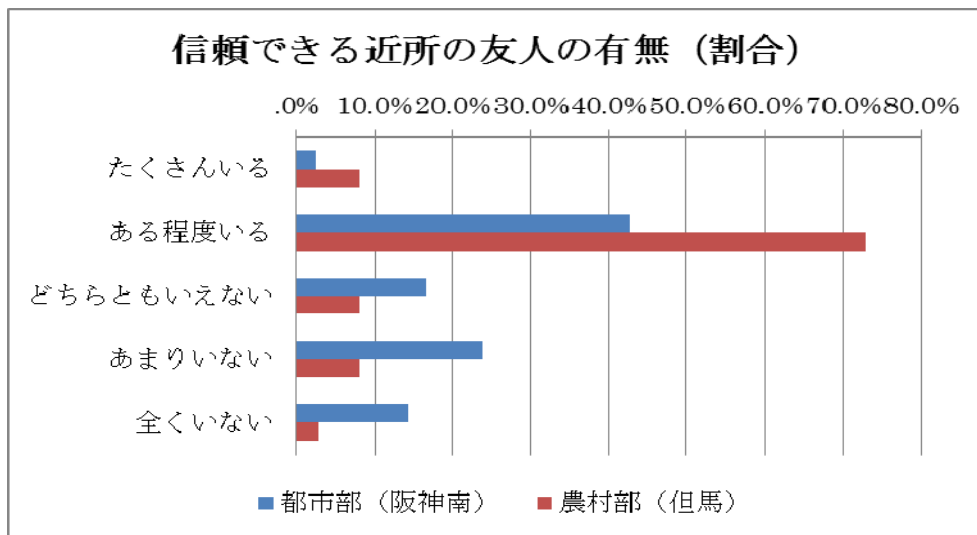


グラフ 19: 相談できる家族の有無 (割合)

次に、「近所の中で友人はいますか」の質問の結果(グラフ 20)からは、農村部地区と都市部地区で大きく異なる結果となっています。農村部地区では、大多数が近所に友人がいるとしています。都市部地区では、いる人といない人に分かれているように見えます。さらに、この関係をより密なものかどうかを判断するために、「信頼」できる近所の友人の割合を聞いています。その結果(グラフ 21)からは、農村部地区と都市部地区の間で大きな隔たりを見ることができました。農村部地区では、信頼のおける友人が多くいることがわかります。



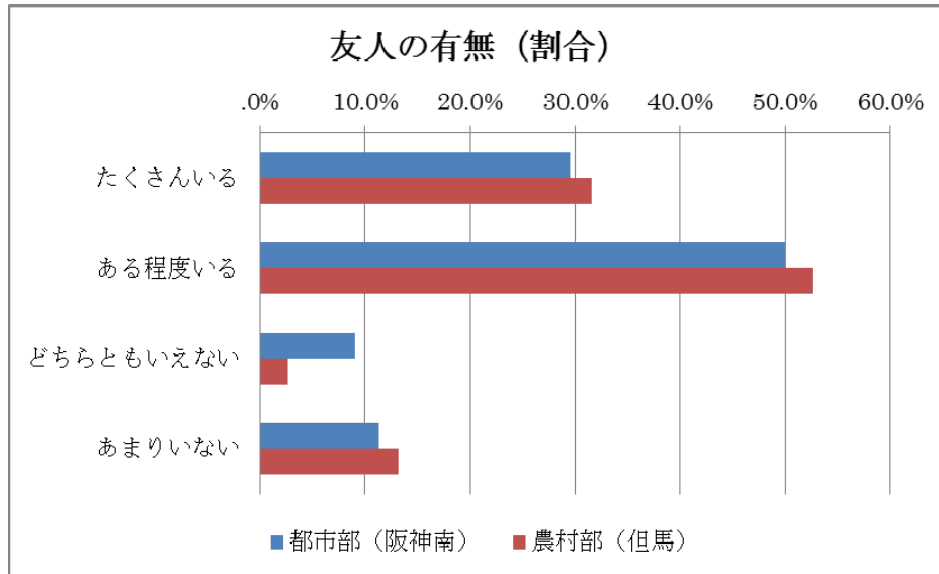
グラフ 20:近所の友人の有無(割合)



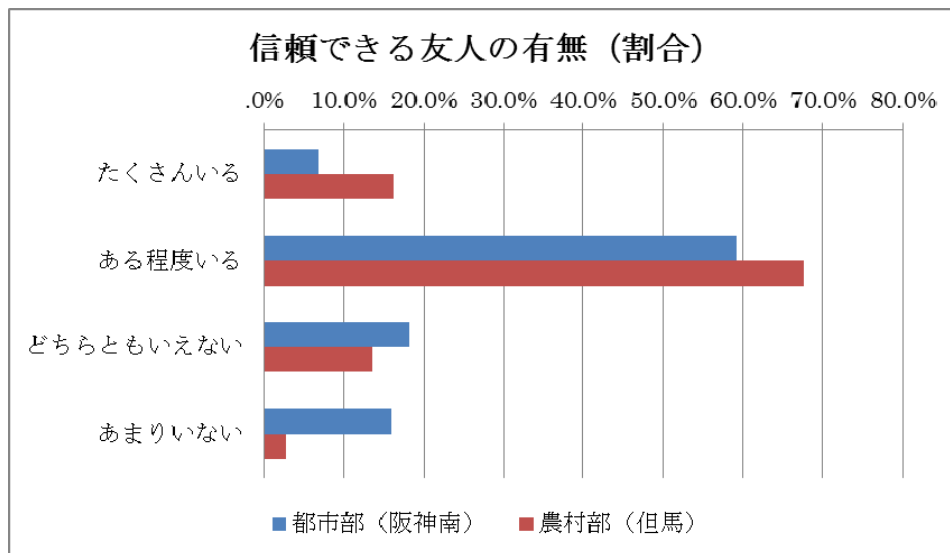
グラフ 21:信頼できる近所の友人の有無(割合)

これらの結果は、住民と地域社会との関係性の濃淡を裏付ける結果といえるかもしれません。

友人の有無に関する結果からは、都市部地区と農村部地区の回答(グラフ 22)の間に大きな差異は見られませんでした。信頼できる人を持っていると答えた人の割合からは、農村部地区の方が信頼できる友人を持つ人が多いことがわかりました(グラフ 23)



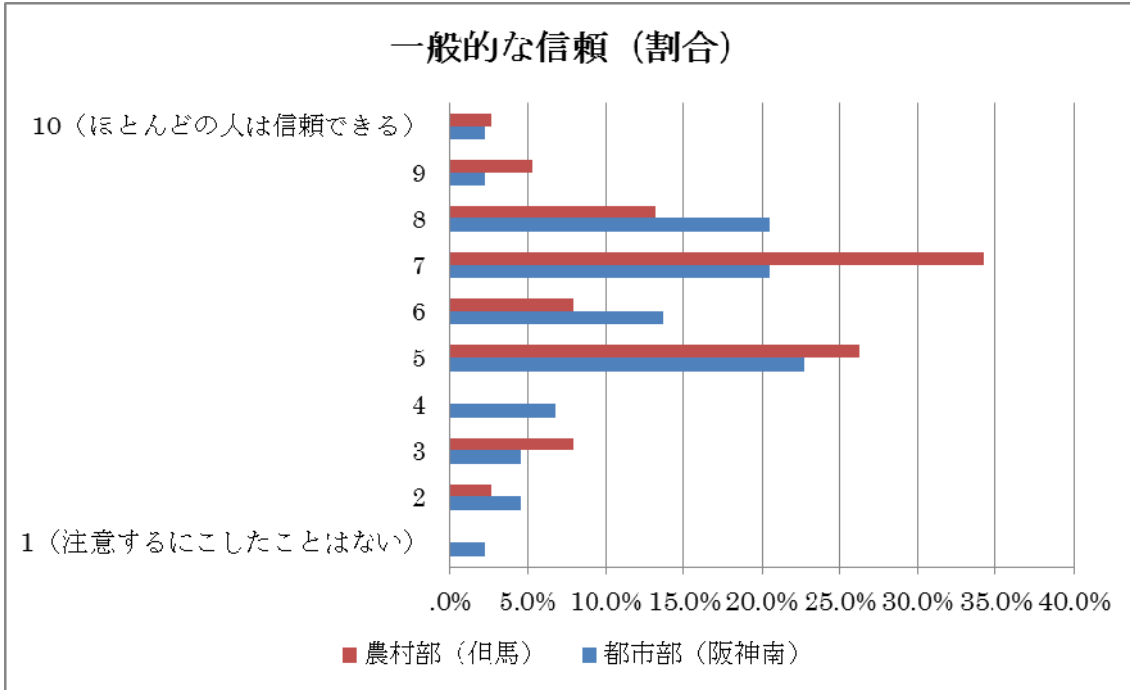
グラフ 22: 友人の有無 (割合)



グラフ 23: 信頼できる友人の有無 (割合)

7.2 一般的な信頼度

社会を構成する市民が持つ他人への「信頼」度合いが幸福度や生活の満足度にも影響を与えるのではないかと考える研究も出てきています。今回、一般的な信頼ということで、よく使われている質問を採用してみました。



グラフ 24:一般的な信頼(割合)

その結果(グラフ 24)をみてみましょう。都市部地区、農村部地区ともに5点から8点の間に回答が集中しているようです。分布をよく見てみると、農村部地区では、他人に注意するにこしたことがないと考えている人の割合は少ないことがわかります。都市部地区では、4点から1点にも分布が見られます。都市部地区では、他人を信頼できると考えている人とそうでない人に分かれているようです。都市部地区は、広範囲の地区を含むデータであるため、回答者自身が生活している地域社会の特性によって大きく変わるのかもしれない。

8. 生活実感の評価～県民意識調査の質問群にみる生活評価

兵庫県民意識調査を参考にした質問群の結果について、まず、兵庫県民意識調査の調査結果との比較を示してみます。それから、いくつかの項目(<地域の学校への信頼><頼りになる知り合い><子育てを支えあう雰囲気><地域活動やボランティア活動への参加><地域の商店街や駅前の活気>)について、農村部と都市部の2つの地区の間に見られる差異に着目しながら、紹介してみます。

8.1 生活実感調査と兵庫県民意識調査の対比

今回の調査は、兵庫県民意識調査票の質問項目を数多く採用しました。まず、共通の質問項目の結果から、どのようなことが言えるのかを見てみます。

表3は、生活実感調査と平成22年度県民意識調査の結果を対比表にしたものです。生活実感調査では、都市部(阪神南)と農村部(但馬)の2つの地域で収集したすべてのデータ、都市部、農村部別のデータ、県民意識調査も同様にして、阪神南地域、但馬地域、兵庫県のデータを記載しています。この表の数値は、兵庫県のビジョンに沿って、このレベルまで達成したいという達成目標値に沿

った数値を算定し、それが「ともにめざそう値」として記載されています。具体的には、たとえば、「健康づくりに取り組んでいますか。」という質問については、その回答には5つの選択肢が用意され、その中から1つを選ぶことになっています。選択肢は、1. 取り組んでいる、2. まあ取り組んでいる、3. どちらともいえない、4. あまり取り組んでいない、5. 取り組んでいない、です。兵庫県は、2015年に達成したい目標を「ともにめざそう値」として明示していますが、それは、上位2つの回答者の割合で示しています。この質問の場合には、「1. 取り組んでいる」と、「2. まあ取り組んでいる」の2つに回答した人の割合を合計した数字が75%を超えていれば目標に到達していると判断するわけです。表3では、この目標値をクリアしたものを薄い緑色で色づけしています。

さて、この表を見てみますと、興味深いことがわかります。これらを列挙してみたいと思います。

- ① まず、全般的に、生活実感調査の方が県民意識調査よりも目標値をクリアしている指標が多い。
- ② どちらの調査も、農村部の方が都市部よりも目標値をクリアしている指標が多い。
- ③ すべてのグループの回答が目標値をクリアしている指標は1つしかなく、食べ物や飲み水の安心感だけである。
- ④ それとは逆に、すべてのグループの回答が目標値をクリアしていない指標は14ある。目標値の到達率は2015年であることを考えれば、14という数はあまり意識する必要はないのかもしれないが、問題なのは、目標値の低い指標の到達率が低いことである。
- ⑤ 14の指標の中には、健康づくりへの取り組み、目的を持った学びの場、自然保護の意識、子育ての支えあい、地域参加、地域の風土や文化、地域経済の活性化、希望、差別のない社会、開発や公共事業の住民の声の反映などが含まれている。これらは、急速に研究が進んできている多面的なウェル・ビーイング指標の中で重要視されている項目と重なっているものが多い。
- ⑥ 都市部では、利便性に関する項目では、評価が高いけれども、それ以外の項目では低い。
- ⑦ 農村部では、地域にかかわる項目では評価が高いけれども、経済、利便性、老後の不安は高い。

表 3:生活実感アンケート調査とH22 兵庫県民意識調査結果との対比表

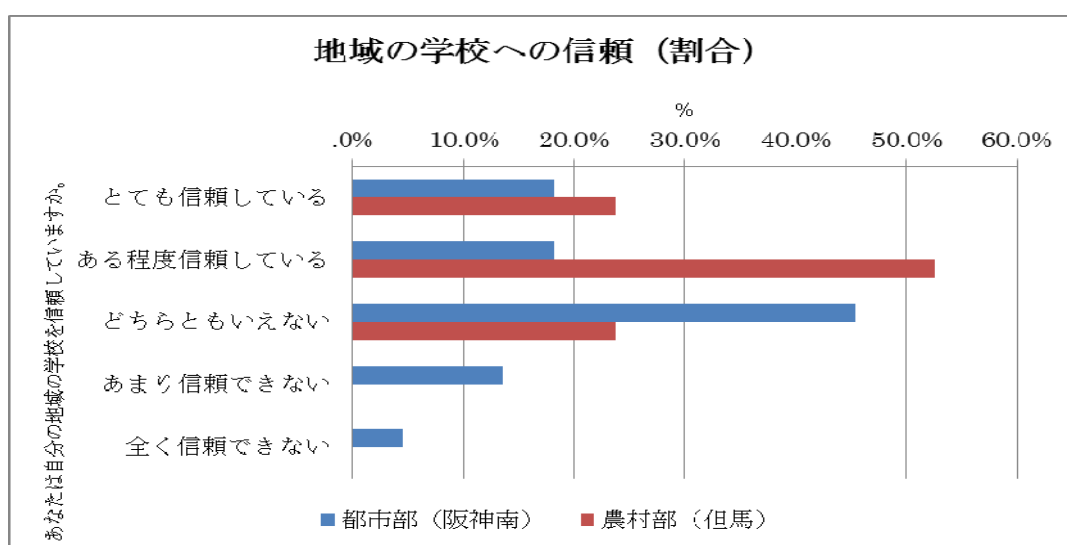
指 標 名	生活実感 調査全数	生活実感調 査都市部 (阪神南)	H22県民意識 調査(阪神 南)	生活実感調 査農村部 (但馬)	H22県民 意識調査 (但馬)	H22県民 意識調査 (兵庫県)	ともにめざそ う値
自分らしい暮らし方ができている人の割合	80.2%	83.7%	64.3%	76.3%	55.3%	61.2%	70%(H27)
健康づくりに取り組んでいる人の割合	67.9%	64.4%	58.6%	71.8%	56.8%	60.4%	75%(H27)
目的をもって学んでいるものがある人の割合	56.0%	57.8%	37.4%	53.8%	36.6%	38.7%	60%(H27)
この1年の間に、仕事やレジャーを問わず、森や山に入ったことのある人の割合	59.0%	60.0%	49.4%	57.9%	62.3%	51.9%	60%(H27)
水を大切に使っている人の割合	74.7%	66.7%	78.9%	84.2%	79.7%	79.8%	80%(H27)
ごみの分別やリサイクルに協力している人の割合	85.5%	88.9%	89.3%	81.6%	93.4%	92.7%	95%(H27)
電気のムダ使いに気をかけるなど、環境に配慮している人の割合	80.7%	77.8%	83.0%	84.2%	85.5%	84.9%	85%(H27)
製品を購入する際に、環境に配慮したものを選んでいる人の割合	51.8%	44.4%	58.0%	60.5%	60.4%	61.0%	60%(H27)
ふだんは、できるだけ公共の交通機関を利用する人の割合	32.5%	53.3%	66.5%	7.9%	19.9%	52.3%	60%(H27)
自然を守るためなら生活が不便でもよいと思う人の割合	57.8%	62.2%	59.0%	52.6%	47.0%	57.4%	65%(H27)
老後に不安を感じる人の割合	25.3%	31.1%	77.7%	18.4%	78.2%	78.7%	65%(H27)
かかりつけの医者がある人の割合	67.5%	68.9%	62.2%	65.8%	67.5%	64.0%	70%(H27)
災害時の避難所を知っている人の割合	77.1%	82.2%	69.6%	71.1%	78.0%	75.7%	75%(H27)
住んでいる家に満足している人の割合	78.6%	82.2%	65.1%	74.4%	70.5%	72.5%	70%(H27)
自分のしごとにやりがいを感じる人の割合	72.7%	78.9%	61.6%	68.0%	58.0%	59.1%	65%(H27)
しごとを通じて技術や能力が高まっていると感じる人の割合	56.8%	57.9%	42.9%	56.0%	42.9%	42.9%	60%(H27)
しごとと自分の生活の両立ができていると思う人の割合	75.0%	84.2%	54.2%	68.0%	53.6%	54.0%	65%(H27)
頼りになる知り合いが近所にいる人の割合	72.3%	56.8%	56.7%	89.7%	65.5%	56.8%	70%(H27)
子育てについて地域で支え合う雰囲気があると思う人の割合	43.8%	34.9%	26.6%	54.1%	40.2%	29.6%	55%(H27)
地域の行事によく参加する人の割合	56.6%	38.6%	23.5%	76.9%	67.0%	34.6%	50%(H27)
地域に自分の活躍の場がある人の割合	37.3%	31.8%	17.8%	43.6%	31.8%	19.2%	50%(H27)
地域の異なる世代の人とつきあいがいる人の割合	63.9%	50.0%	32.1%	79.5%	56.1%	36.5%	50%(H27)
近所に子どもの遊び場や人々の憩いの場がある人の割合	66.3%	79.5%	58.7%	51.3%	42.2%	53.9%	70%(H27)
身近に自然とふれあえる場がある人の割合	72.3%	54.5%	51.9%	92.3%	71.8%	62.3%	80%(H27)
地域の風土や文化について知っている人の割合	42.2%	34.1%	32.5%	51.3%	52.3%	36.3%	55%(H27)
自慢したい地域の風景や名所がある人の割合	54.2%	43.2%	50.0%	66.7%	57.7%	49.1%	55%(H27)
地元や県内でとれた農林水産物を買っている人の割合	54.2%	40.9%	41.5%	69.2%	72.4%	58.0%	70%(H27)
住んでいる地域以外に「ふるさと」と思える場所がある人の割合	58.5%	54.5%	54.7%	63.2%	43.7%	52.7%	55%(H27)
地域活動やボランティア活動をしている人の割合	39.8%	27.3%	20.2%	53.8%	41.0%	24.5%	50%(H27)
災害に対して住んでいる地域は安全だと思う人の割合	51.2%	57.8%	52.9%	43.6%	49.5%	61.4%	60%(H27)
夜9時以降に住んでいる地域を安心して歩けると思う人の割合	58.3%	57.8%	61.6%	59.0%	56.6%	58.3%	60%(H27)
住んでいる地域は高齢者や障害者にも暮らしやすいと思う人の割合	53.6%	57.8%	44.1%	48.7%	33.0%	38.4%	45%(H27)
住んでいる地域は買い物や通院に便利だと思う人の割合	54.8%	91.1%	81.2%	12.8%	34.9%	64.7%	65%(H27)
住んでいる地域の子どもは伸び伸びと育っていると思う人の割合	68.7%	56.8%	60.1%	82.1%	66.3%	61.9%	60%(H27)
住んでいる地域の公共交通は便利だと思う人の割合	50.6%	84.1%	75.9%	12.8%	18.5%	52.7%	55%(H27)
住んでいる地域はきれいだと思う人の割合	71.1%	54.5%	72.0%	89.7%	64.0%	67.4%	65%(H27)
住んでいる地域の自然環境は守られていると思う人の割合	55.4%	40.9%	52.9%	71.8%	61.7%	55.2%	55%(H27)
住んでいる地域の商店街や駅前に活気があると思う人の割合	33.7%	61.4%	35.8%	7.7%	3.9%	26.0%	40%(H27)
住んでいる地域に誇りや愛着を感じる人の割合	66.3%	54.5%	58.2%	79.5%	53.2%	54.3%	70%(H27)
住んでいる地域に観光などの訪問客が増えていると思う人の割合	11.1%	7.0%	11.9%	15.8%	20.4%	11.6%	40%(H27)
住んでいる地域は新しい事業をおこすのに魅力的だと思う人の割合	21.0%	18.6%	18.7%	23.7%	14.3%	15.4%	40%(H27)
住んでいる地域に住み続けたい人の割合	74.1%	81.4%	71.3%	65.8%	67.3%	68.0%	70%(H27)
性別や年齢を問わず、意欲のある人が働きやすい環境が整っていると思う人の割合	13.4%	56.8%	13.7%	5.3%	4.3%	10.2%	35%(H27)
若者が希望を持てる社会だと思う人の割合	7.3%	6.8%	6.2%	7.9%	2.9%	6.0%	30%(H27)
挑戦する人を進んで応援する社会だと思う人の割合	15.9%	18.2%	9.4%	39.5%	6.5%	9.1%	30%(H27)
自分にあった職業への転職がしやすいと思う人の割合	31.3%	71.4%	5.1%	15.8%	1.1%	3.8%	30%(H27)
不当な差別がない社会だと思う人の割合	28.0%	22.7%	23.7%	34.2%	26.8%	21.6%	50%(H27)
食べ物や飲み水は安心だと思う人の割合	86.6%	90.9%	76.0%	81.6%	86.3%	77.5%	65%(H27)
身近な環境のことを知る仕組みが整っていると思う人の割合	35.4%	43.2%	26.9%	26.3%	23.8%	22.5%	45%(H27)
開発や公共事業は住民の意見を反映して行われていると思う人の割合	25.6%	31.8%	15.8%	18.4%	19.3%	13.2%	40%(H27)

8.2 2つの地域における生活実感の差異

次に、いくつかの項目について、2つの地区の回答結果の差異を紹介してみます。

<地域の学校への信頼>

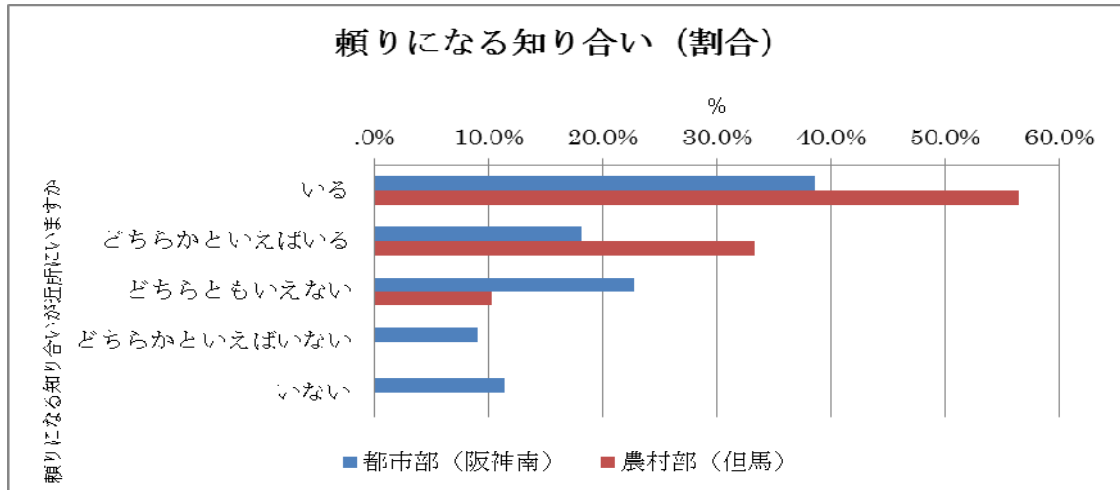
「あなたは自分の地域の学校を信頼していますか」の質問に対する回答をグラフにしてみました。このグラフから、明らかなように、農村部地区においては、地域の学校への信頼は高く、信頼できないとする回答はありませんでした。それに対して、都市部地区の方の回答では、信頼できる人と信頼できない人が拮抗していました。学校と地域との連携や協働の必要性が指摘されていますが、それは、全国一律に当てはまる課題ではないということの意味しているのかもしれませんが。



グラフ 25:地域の学校への信頼(割合)

<頼りになる知り合い>

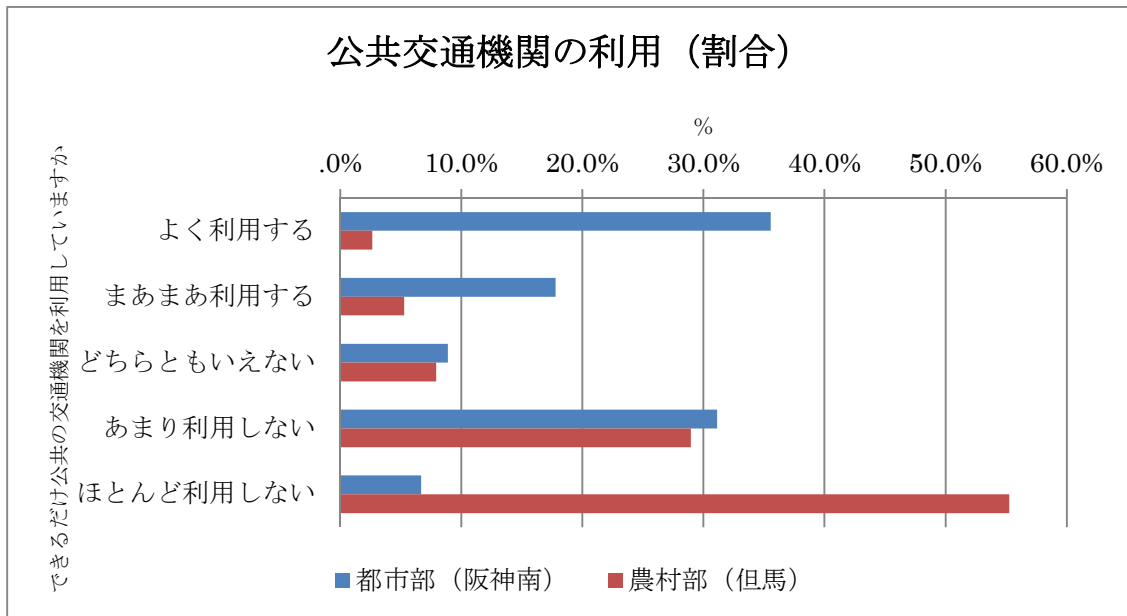
「頼りになる知り合いが近所にいますか」に対する回答はグラフ 26 の通りでした。農村部地区では、頼りになる知り合いがいる人は多数でしたが、反対に、都市部地区では、その数は、かなり少なくなっています。地域の中の絆の濃さの違いを垣間見ることができます。



グラフ 26:地域の学校への信頼(割合)

<公共交通機関の利用>

「できるだけ公共の交通機関を利用していますか」という問いに対しての回答は、農村部地区と都市部地区ではっきりと分かれていました。農村部地区では、公共交通機関の利用は極端に少なくなっています。農村部地区では、バスの本数が少なく、また、電車路線も限られ、本数にも限りがあるなど、利便性のよくない生活環境を反映した結果といえます。他方、都市部地区では、公共交通機関の利用者は多いのですが、同時に、利用していない層も一定程度いることがわかります。

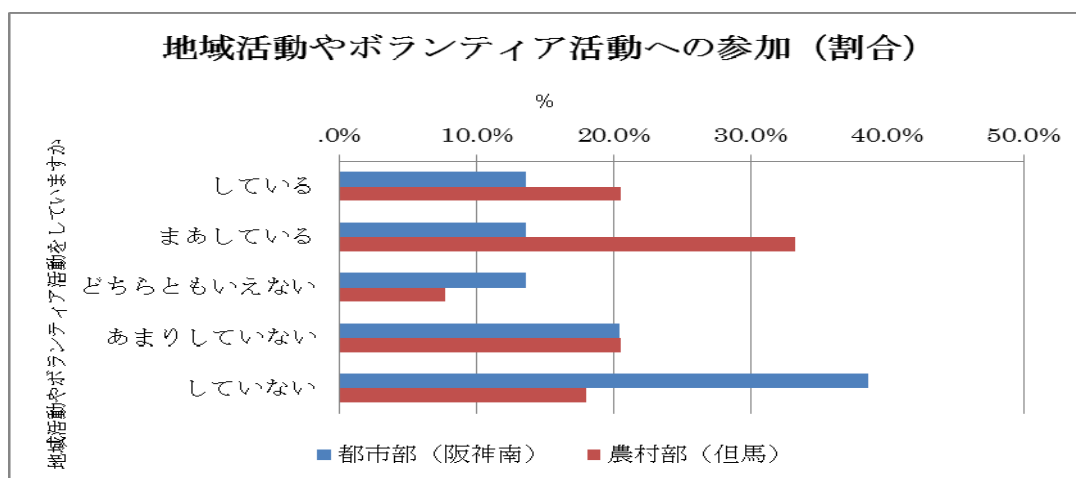


グラフ 27:公共交通機関の利用(割合)

<地域活動やボランティア活動への参加>

「地域活動やボランティア活動をしていますか」という問いに対して、その回答を整理したところ、グラフ 28 のように都市部地区と農村部地区で大きく異なる結果を得ました。農村部地区では、地域活

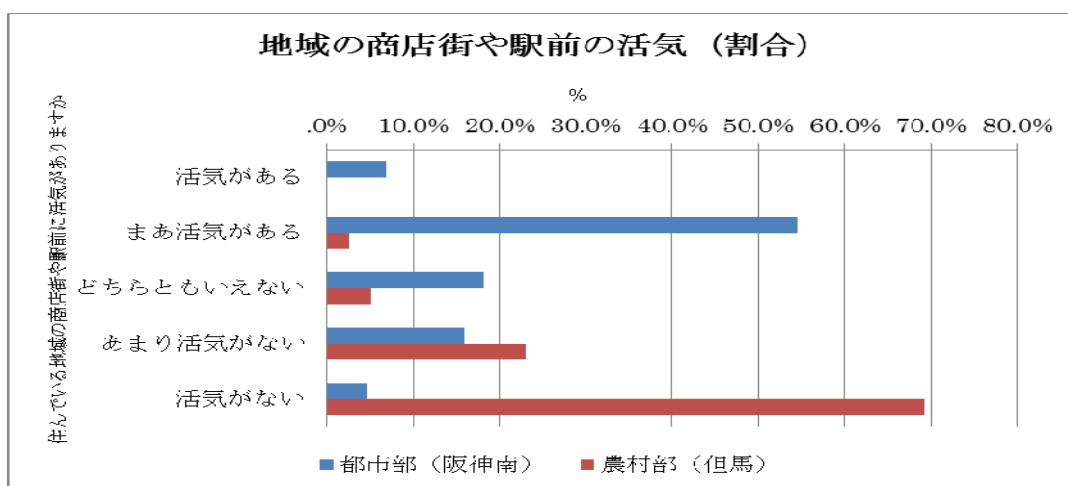
動やボランティア活動に参加していると答えた人は大変多いのに対して、阪神南にある地区では、活動に携わっている数はとても少ない。都市では、積極的にボランティアを奨励している反面、実際の活動にはなかなかつなげていないことなのかもしれません。いずれにしても、興味深い結果です。



グラフ 28: 地域活動やボランティア活動への参加(割合)

<地域の商店街や駅前の活気>

「住んでいる商店街や駅前に活気がありますか」の問いに対する回答は、グラフ 29 の通りです。このグラフからは、明らかに、都市部地区においては、商店街や駅前の活気が比較的あるということです。これに対して、農村部地区では、7 割近くの人が活気がないと評価しているのがわかります。この回答は、一般に言われている農村部地区の疲弊を表しているのもですし、都市部地区においても、「まあ活気がある」との回答が多いけれども、「活気がある」の回答はとても少ないことがわかります。都市部地区においても、地域経済の抱える問題は小さくないことを示しているののかもしれません。

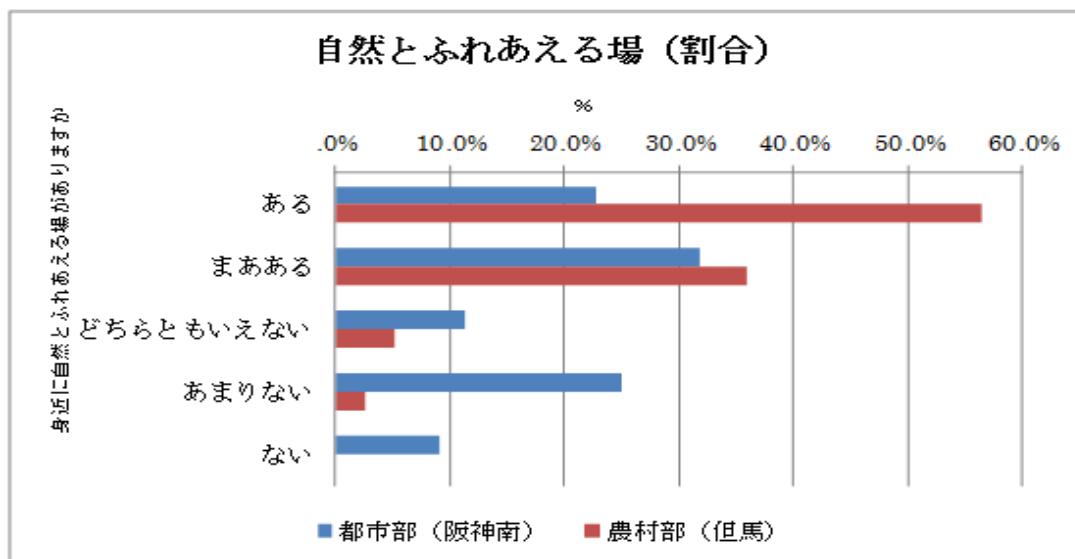


グラフ 29: 地域の商店街や駅前の活気(割合)

<自然とふれあえる場>

身近に自然とふれあえる場があるかどうかに関しては、都市部地区では「ある」と「ない」に分化していますが、農村部地区では、圧倒的に「ある」という回答であることがわかりました(グラフ 30)。やは

り、農村部地区での暮らしでは、大いに自然にふれあえることができるということが生活実感の中に感じ取ることができました。



グラフ 30: 自然とふれあえる場 (割合)

9. 幸せや不幸せを左右するもの～インタビュー調査結果から⁸

さて、これまでは、生活実感に関して、アンケート調査票を用いて得られたデータによって、わかってきたことを紹介しました。幸福にも温度差があること、生活する場所によっても大きく異なることなどが見えてきました。

先に触れたように、今回の調査は、「幸せや不幸せっていったい何なのだろうか」を人々の目線から整理しようとする試みです。インタビューによって、本当にいろいろな種類の幸せや不幸せを知ることができました。ここでは、それらの膨大な情報を整理し、分析したものから、かいつまんで、いくつかのことを紹介します。

9.1 インタビュー調査の方法

<インタビューの質問内容>

幸せと不幸せに関する2種類の質問を用意しました。

まず、幸せに関する質問ですが、次の3つでした。

- ① 今まで生きてきた中で、幸せと感じたときはどのようなときでしたか
- ② あなたにとって幸せな人生とはどのような人生ですか
- ③ 幸せな人生を送るために、あなたが心がけていることは何ですか

また、不幸せに関する質問については、次の3つでした。

- ① 今まで生きてきた中で、不幸せと感じたときはどのようなときですか
- ② 今までの人生の中でつらかったのはどのようなときでしたか
- ③ あなたにとって不幸せな人生とはどのような人生ですか

⁸ インタビュー調査結果の詳細に関しては、山本杏子(2011)「人々の声から見える幸せ～兵庫県の事例研究から～」修士論文、大阪大学、を参照してください。

<分析方法>

インタビューでは、全てのデータを録音し、その録音データを文章化しました。そして、文章化したデータの中で、話し手の考えを現しているキーワードを見つけ、それらのキーワードをコードとみなし、コードによって、すべての文章をくまなく確認していきました⁹。これらのキーワードを集約し、幸せの鍵となる要素、不幸せの鍵となる要素を整理しました。

その後、要素ごとに、その要素のことを何人の人がインタビューの中で触れているかを確認し、どの要素を重視しているのかを検証しました。

また、要素ごと、あるいは、異なる要素間の関係性についても分析をしました。分析をもとにして、幸せの要素、不幸せの要素を図解して、整理しました。

下の図1は、インタビュー・データの分析のプロセスを表わしたものです。

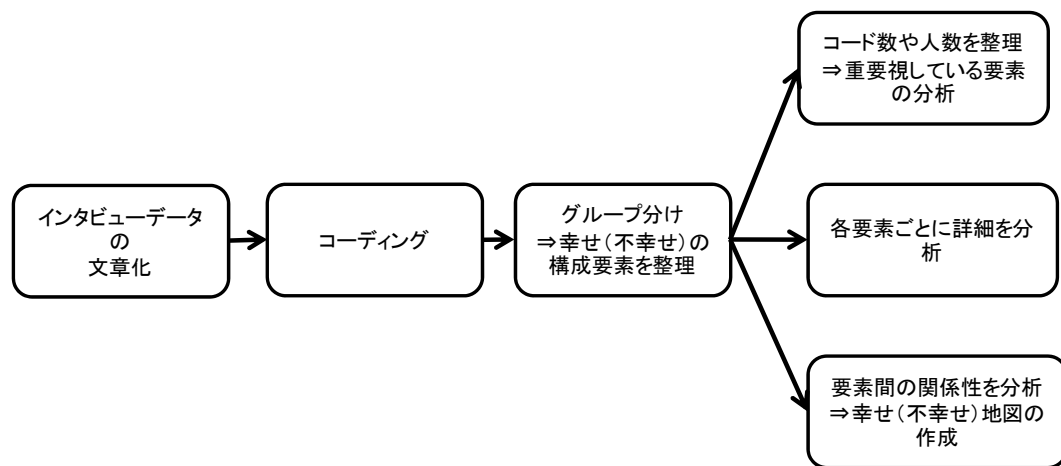


図1:インタビュー調査データの分析のプロセス

<インタビュー回答者の特徴>

インタビューは、アンケート調査回答者の中から、都市部地区39人、農村部地区14人の合わせて53の方に協力していただきました。

年齢構成は、全体、都市部、農村部地区ともに、40代、50代、60代、70代は、比較的バランスよく回答を集めることができましたが、10代、20代、30代が極めて少ない結果となっています。

9.2 幸せを左右する要素

まず、インタビュー・データをもとに、何が幸せを左右するのかを紹介します。

<幸せの構成要素>

インタビュー・データをもとにして、いったいどのようなことが幸せの要素といえるのかに焦点をあて、主要な要素を図2のように整理することができました。

要素は、「人」、「健康」、「お金」、「雇用」、「時間」、「自由」、「達成」、「楽しみ」、「考え方」「結

⁹分析の際、MAXqda10という質的データ分析ソフトを利用しました。

婚」「政治」「人の役に立つ」「その他」の13個に整理することができました。

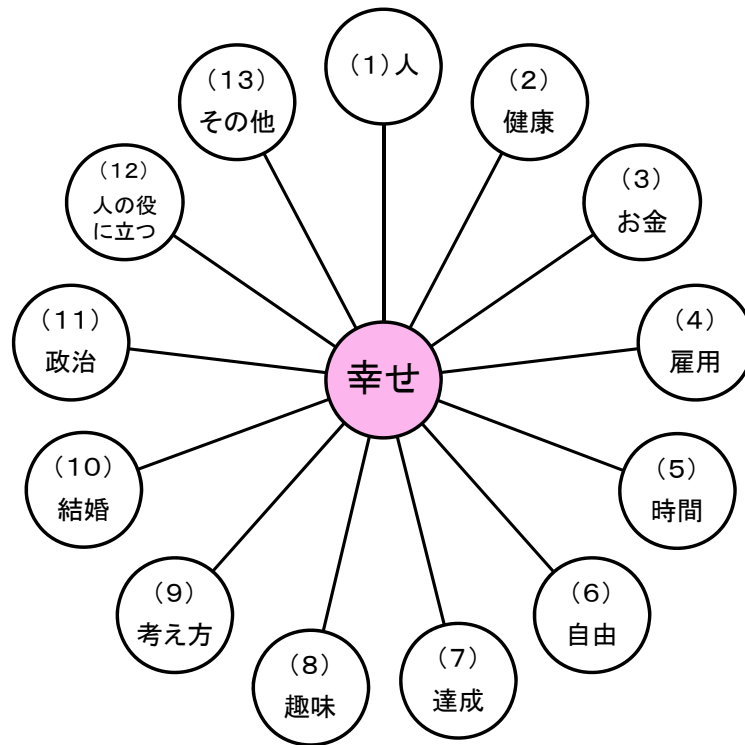
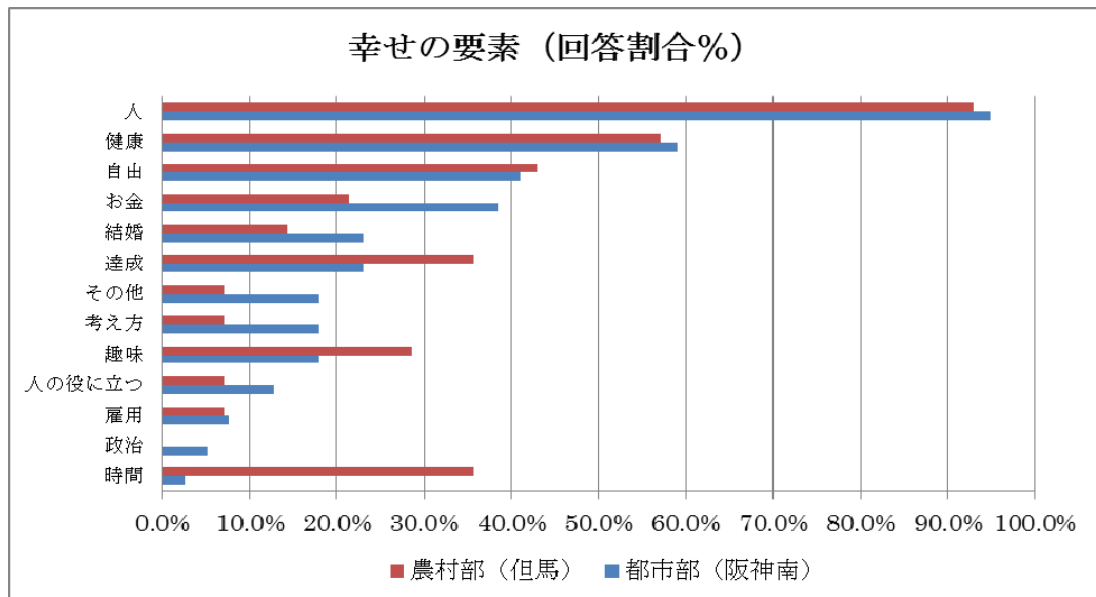


図 2: 幸せの構成要素

次に、13個の幸せの要素の中で、どの要素が重要と考えられているのかを整理してみました(グラフ31)。



グラフ 31: 幸せの要素 (地区別)

これによれば、農村部地区、都市部地区ともに、人や自由に関することが幸せの大切な要素であると考えていることがわかります。ところが、時間、趣味や達成という要素に関しては、農村部地区の

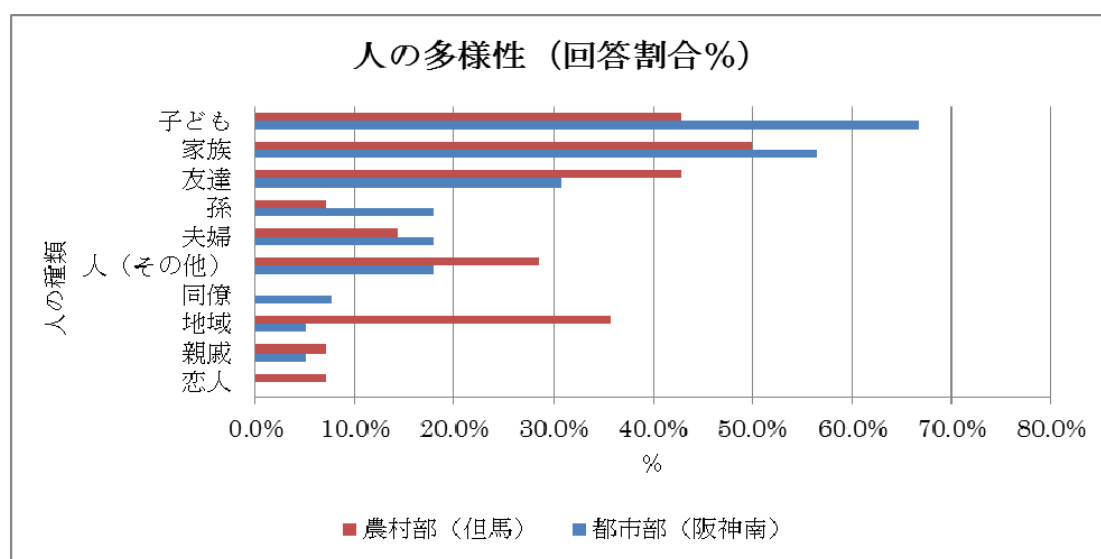
人々からのインタビューからは、頻繁に出てきました。他方、都市部地区の人々のインタビューでは、お金、結婚、政治、考え方などに触れる人が多くいたことが見てとれます。このように、幸せの要素には、共通の要素が見られる反面、それらの要素間の優先度あるいは重要度というものは、一様ではないこと、また、特定のグループ(たとえば、地域性、性別、年代別など)によって、その重要性が異なってくるが見えてきます。

< 鍵を握る幸せ要素の構造 >

① 「人」要素の多様性

13の要素の中で、都市部地区、農村部地区を問わずに、一番重要視されたのが「人」に関する要素でした。人というのは、具体的には、どのような人を指すのでしょうか。

グラフ 32 が示しているように、人には、様々な関係の人を指しています。子ども、家族、友人はインタビューの中で頻繁に出てきたことがわかります。都市部地区と農村部地区では、重視する人も異なっているようです。農村部地区では、地域の人が重要度が高いという結果になっています。これは、アンケート調査による地域社会との密接な関係性や幸福になるために必要なものとして、コミュニティとの関係がでていましたが、それらに通じる結果と言えるでしょう。



グラフ 32: 「人」要素の多様性

② 人との関係性の構造

人という要素が、家族や友人、親戚のことを指す場合、インタビューの中で、その人と家族、友人、親戚の人々との「関係性」について述べる人が数多くいました。また、夫婦や同僚を指す場合には、全員が夫婦や同僚との関係性について語ってくれました。それでは、具体的には関係性とはどのようなことを意味しているのでしょうか。分析をした結果、人との関係性には、主に、4つの種類の関係性が見いだされました。それらは、「支え合い」「分かち合い」「円満」「信頼」の4つだったのです。

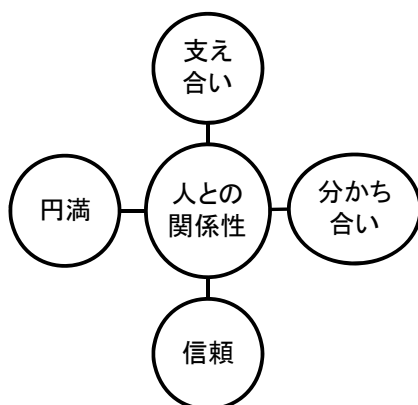


図 3:人との関係性の分類

③ 「お金」とは？

経済学では、人々の幸福をもたらすものとして、「お金」を重要視してきました。インタビューの中でも、とくに、都市部地区の人を中心に、「お金」をあげる人が多くいました。

一口にお金といっても、その指す意味は同じなのでしょうか。インタビューデータを整理してみると、「お金」には3種類の意味があることを見出すことができました。1つめは、最低限の生活をしていくために必要なお金(「生活のためのお金」)です。2つめは、自分で何かに着手できるためのお金(「自由のためのお金」)です。そして、3つめは、蓄積するお金(「裕福のためのお金」)です(図4)。

インタビューによれば、6割の人が生活のための「お金」を指しており、約3割弱の人が何かをするためのお金に余裕があることを指し、興味深いことに、単純にお金の蓄財のみを重視する人は2割にも届きませんでした。

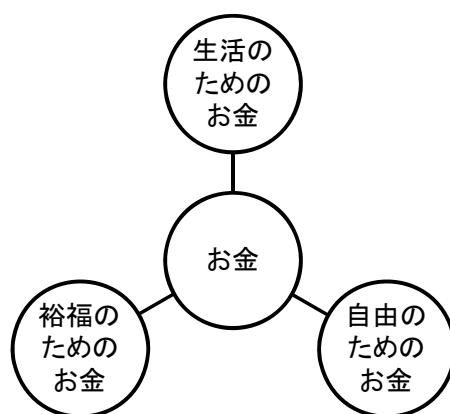


図 4:「お金」の意味

このように、人々の声によって、貨幣という点からは、まったく同じものであるお金が、その利用価値には差異があることがわかりました。人が幸せであるために必要なお金とは、やみくもにお金を蓄積していくことだけではないということがわかります。

④ 健康の種類

次に、「健康」について、もう少しその内容を掘り下げてみます。インタビュー・データを分析してみたところ、健康とは、自分の健康、家族(家族、子ども、配偶者)の健康を指していることがわかりました。また、その中身ですが、「身体の健康」と「心の健康」、そして「漠然とした健康」の3つのタイプの健康に分けることができました(図5)。幸福や満足感に関する調査や研究によって、重要な要素であるとされる「健康」ですが、ここでも、その重要性は確認することができました。

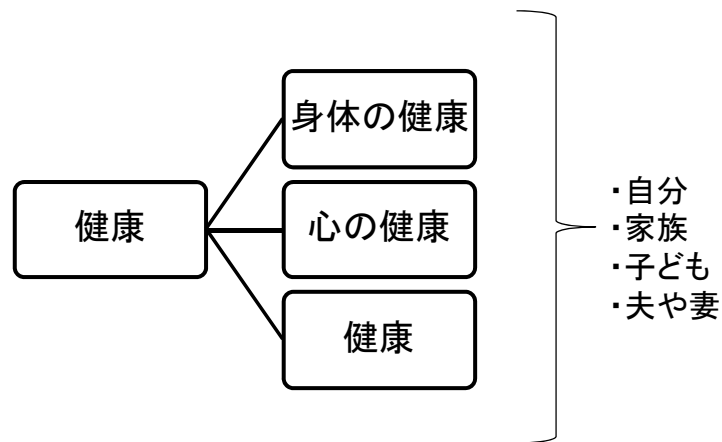


図5:「健康」の意味

9.3 不幸せをもたらす要素

次に、不幸せをもたらす要素は何かについて、まとめてみます。

<不幸せの構成要素>

インタビュー・データをもとにして、いったいどのようなことが不幸せの要素といえるのだろう。データをもとに、図6のように整理することができました。

要素は、「孤独」「死」「人間関係の不和」「家庭問題」「仕事」「経済的な不安」「失業・無職・職が不安定」「自由がない」「考え方」「時間がない」「戦争」「不健康」「介護」「その他」の14個に整理することができました。

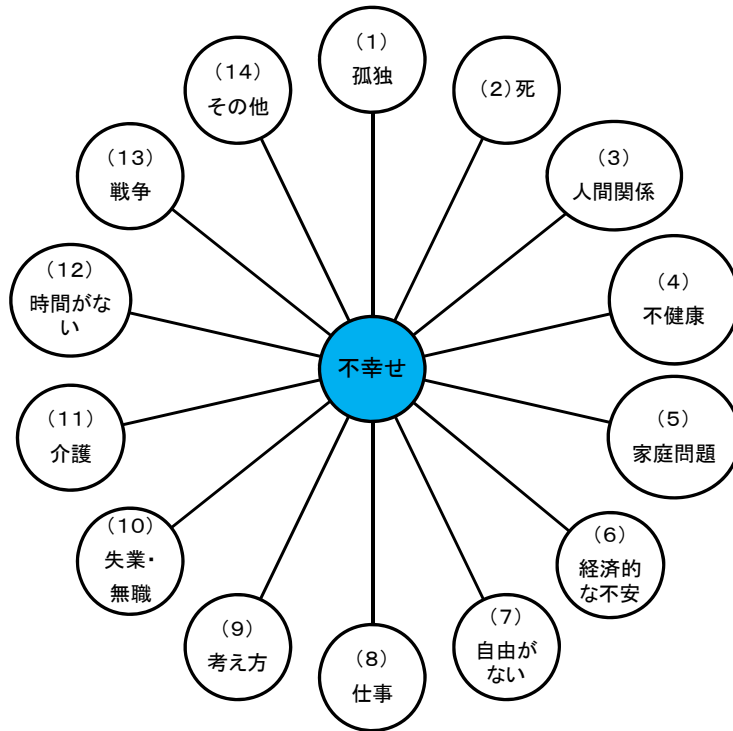
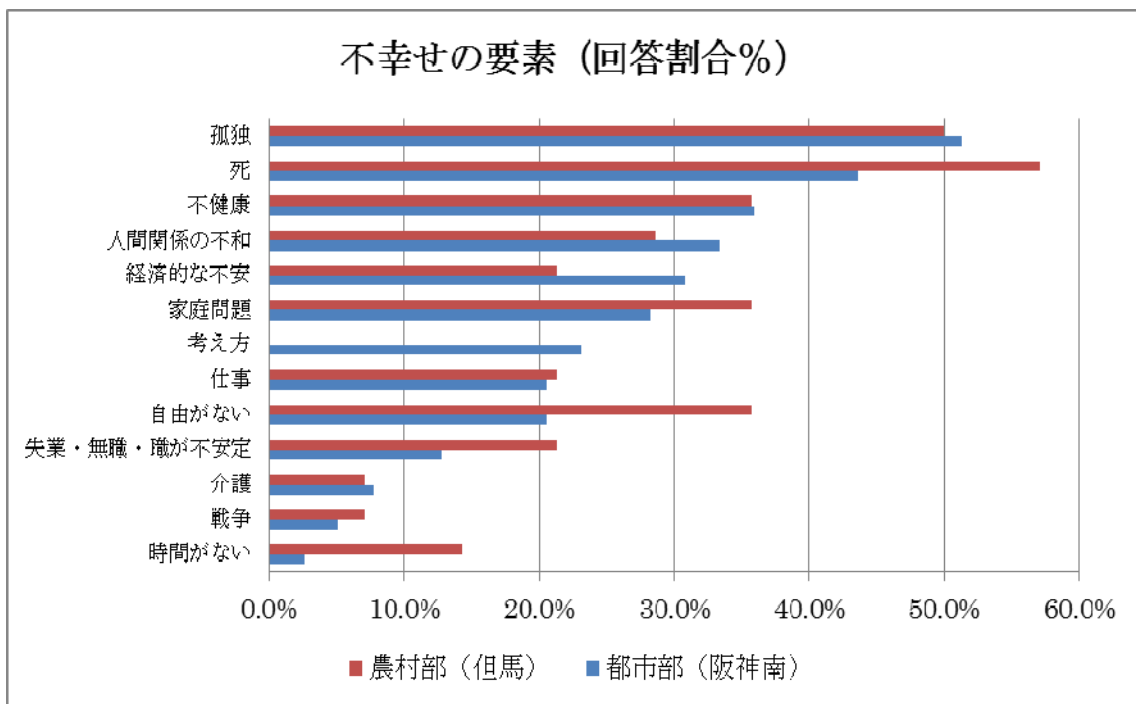


図 6:不幸せの構成要素

次に、14 個の不幸せの要素の中で、どの要素が深刻なものと考えられているのかを整理してみました(グラフ 33)。



グラフ 33: 幸せの要素 (地区別)

これによれば、「孤独」「不健康」「死」などが、都市部地区、農村部地区ともに不幸せをもたらす要素としてあげられていました。農村部地区では、自由がないこと、時間がないこと、失業などの経済的不安定さが不幸せの要素であるということがわかります。他方、都市部地区では、考え方の違い、経済的な不安などが不幸せの要素であるようです。このように、不幸せの要素も、幸せの要素と同様に、共通の要素が見られる反面、それらの要素間の優先度あるいは重要度というものは、地区によって、一様ではないこと、また、特定のグループ(たとえば、地域性、性別、年代別など)によっても、要素間の重要性が異なってくることが示唆されます。

< 鍵を握る不幸せ要素の構造 >

① 仕事の意味合い

不幸せをもたらす仕事とは一体どのような仕事を意味しているのでしょうか。インタビューの中で、語られた「仕事」を整理してみたところ、それらは、「重労働」「精神的な重圧」¹⁰「失敗・トラブル」「その他」の4種類に分けることができました。幸福の経済学に関する研究成果の中で、失業は幸福感を著しく低下させることがわかってきていますが、今回のインタビュー調査では、有業であっても、仕事の中身によっては、不幸せを感じてしまうことがあることが示唆されます。

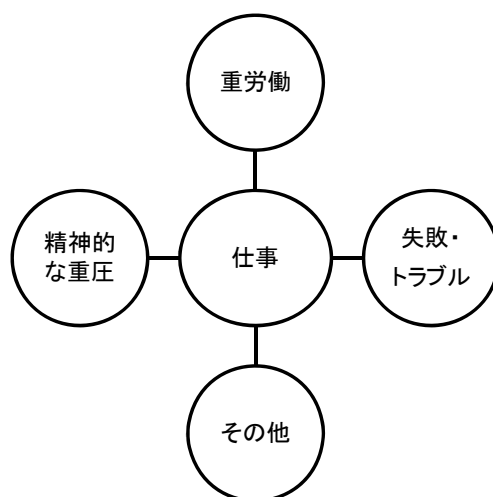


図7:不幸せの要素としての「仕事」

② 「家庭問題」をめぐる不幸せの要素間の関係性

不幸せをもたらす14の要素間の関係性に着目してみました。「家庭問題」を取り上げているインタビュー・データを整理してみると、関係しあっているのは、「死」「時間がない」「仕事」「孤独」「人間関係の不和」「不健康」の6つの要素でした。どのように関係しているかを分析してみると、図8のようになっていました。時間がないことで家庭問題につながってしまうこと、不幸せを起こすような仕事から家庭問題につながることで、病気になることで家庭問題が起きてしまうことなど、である。また、とりわけ、「死」と「家庭問題」のことを関連させて話してくれました。若くして亡くなってしまった場合、残された家族にとって、その死後がとてつらいもので、結果として、家庭が荒れてしまったことがインタビ

¹⁰ 「重労働」とは業務量が多い、残業が多い、体力的につらいなどのことを「重労働」としてまとめました。「精神的な重圧」とは、結果を出さないといけないプレッシャーや責任感などを指しています。

ューで語られていました。不幸せになっていく過程では、特定の1つの要素だけで進むというものではなく、むしろ、複数の要素が絡み合うことで不幸せをもたらしていくということが推察されました。

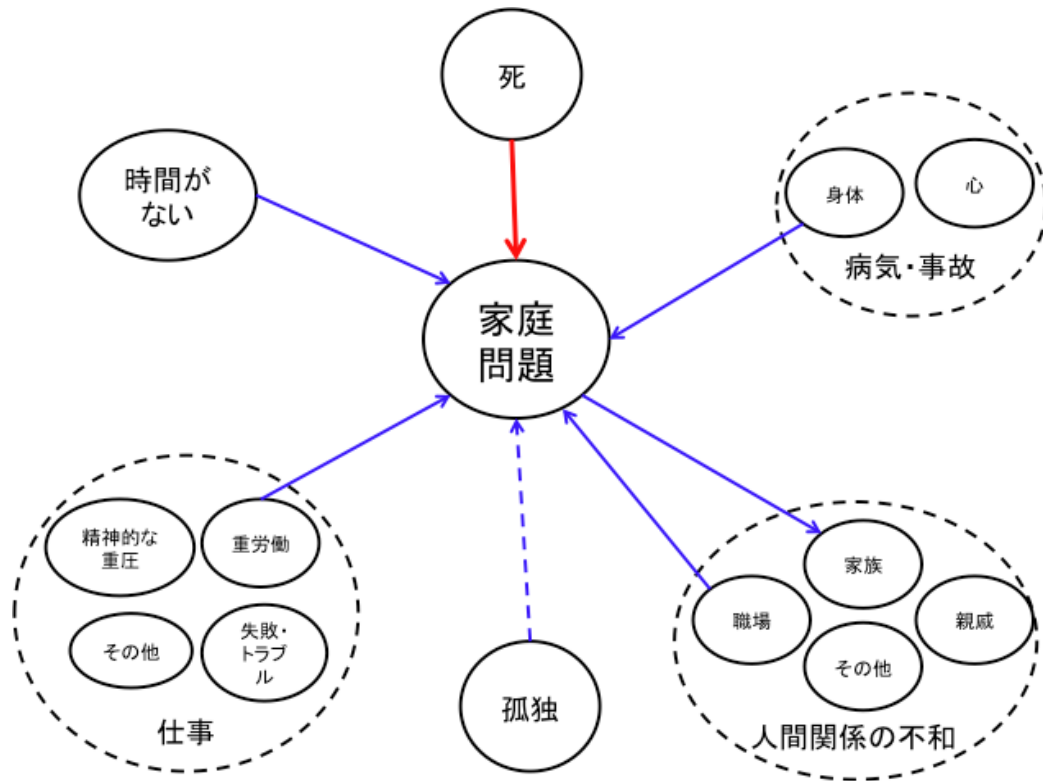


図 8:「家庭問題」をめぐる不幸せの要素間の関係

③ 「不健康」をめぐる不幸せの要素間の関係性

「不健康」を例にとって、要素間の関係性について掘り下げてみました(図 9)。まず、不健康の要素の内部で、心の不健康と身体の不健康の2つがかかわりあって語られていることがわかりました。そして、不健康は、「自由がない」「介護」「失業・無職・職が不安定」「人間関係の不和」「家庭問題」の5つの要素とも結びついていることがわかりました。身体の健康が失われてしまうと、自由が失われ、介護が必要になりやすく、また、家庭状況が悪化すれば、不健康にもなりやすくなるというような関係性を見出すことができました。

すべての要素に言えることですが、他の要素との因果関係を把握することによって、具体的にどのようなことをすれば、不幸せを取り除くことにつながるかを考えていけるのだと思います。

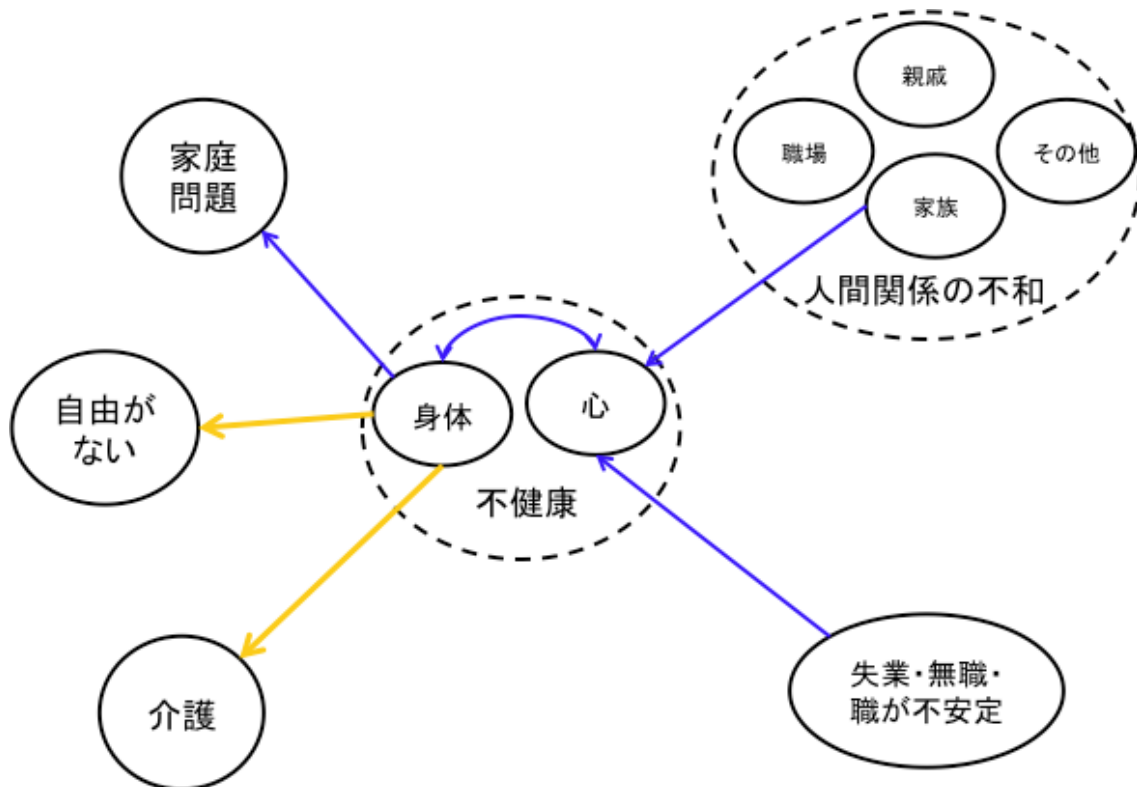


図 9:「不健康」をめぐる不幸せの要素間の関係

10. まとめ

今回の調査は、小規模なパイロット調査にすぎませんでしたが、いくつかの知見を得ることができたと思います。具体的には、3点あげられると思います。

まず、幸福度が同じであっても、その幸福度を支えている中身(要素)は実に多様であるという点です。この多様性の中には、もちろん、都市部や農村部など生活する地域に関係なく、誰しもが大切にしている要素もあります。それは、健康であり、家族であり、家計です。他方、今生活している地域社会の文化、風土、生活慣習などの特性に応じて、幸せを確かなものとするための特有の要素や要素への重みづけが異なっているということです。

幸福度の要素の多様性に関係しますが、地域ごとに幸福度を左右する要素が異なっていることが分かった場合、その地域特性をそのまま尊重していくことが妥当なのか、それとも、そのように人々が思うのは、現在の生活状況によって、それらを大切に感じているからなのか、よく吟味する必要もありそうです。例をあげてみましょう。「地域コミュニティとの関係性」は、農村部地区では幸福感を判断する際に重要視した項目として、3番目に重視したと回答されましたが、都市部地区では重要度上から7番目でした。しかし、このような結果を根拠にして、農村部地区では、地域コミュニティとの関係性が密だから地域コミュニティとの関係性の重要度が高いのだろう、他方、都市部地区では隣近所との付き合いなども希薄なために、その重要度はそれほど高くはないというような解釈論で済ませてしまっただけなのかどうかという点です。つまり、生活実感調査の可能性は、地域生活の当事者である地域住民による自分自身と自分の生活する地域社会の評価にあり、調査結果を知ることによって、どのような地域なのかに興味を持ち、どのような地域を実現していきたいかへの思いを膨らませていく、そのよう

な振り返りと気づきを促す可能性を持っているということです。

地域住民が地域コミュニティとの関係性の意味を考え始めることによって、地域コミュニティとの関係性が自分自身の生活をよくするために欠かせないことなのかどうか、自分の生活にプラス面、マイナス面でどういう意味を持つのだろうかというように、自らが主体的に生き方や地域社会のあり方を考えていくことができる題材を提供できる可能性があるということです。また、先行研究や調査結果から、地域コミュニティとの関係性が、誰にとっても幸せな生活を実現していくために重要な要素であるということが明らかになった場合、都市部地区のように地域コミュニティの関係性が弱い地域では、どのようなことをすれば、コミュニティの関係性を密にしていけるのかということに、地域で生活する人々が自立して知恵をめぐらしていくために活用できる可能性があるということです。つまり、生活実感調査で得られる情報は、地域社会や個人の生活の現状の解釈にとどまることなく、それらを行政、市民の間で広く共有していくことによって、社会改善に利用していくことにこそ価値があるということが見えてきたと思います。

生活実感パイロット調査として、アンケート調査とインタビュー調査の2種類の調査方法を組み合わせてみました。2つの組み合わせによって、どちらか1つの方法だけでは十分には理解できない点が多々あったというのは、大きな収穫でした。今後、生活実感調査を発展させていくための課題は、まず、アンケート調査の質問項目を整理し、練り直していくことです。そうすることによって、多くのサンプル数に耐えるものになると思います。インタビュー調査は、アンケートによって把握できない幸せなどの意味、たとえば、日々の生活の中で実感してきた幸福や不幸の具体的な中身を深く掘り下げていく手助けになります。また、生活実感の推移を見ていくためには、同じ回答者に定期的に回答してもらうパネル調査を行うことが重要であるという点も将来の課題です。生活実感パネル調査を地域社会、できれば、市町村単位で実施することができれば、生活当事者である住民の目線で自身の生活の振り返りを核にしつつ、生活地域社会のモニタリングと地域改善の取り組み提案や活動につながる可能性もあります。

最後に、課題はたくさんありますが、それでも、生活する人々の声を生かすことで、気づきと行動を引き出す手法として、生活実感調査を開発していくことには大きな意味と可能性があるということを確認できたことは、今回のパイロット調査の成果といってよいと思います。